
マブラヴ オルタネイティヴ 今から（チートが）介入する予定です

モアイ像

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マブラヴ オルタネイティヴ 今から（チートが）介入する予定です

【Nコード】

N9603U

【作者名】

モアイ像

【あらすじ】

神様（管理者）に何かの手違いで亡くなり、「もう一度、生きてみないか？」と言われ、マブラヴ オルタネイティヴの平行世界に送り出される物語

注意書き、駄文・文才なし・文章力0・誤字脱字あり・支離滅裂・ご都合主義・チート・独自設定・作者は原作曖昧・更新は曖昧などの小説です、このような小説に会わない人は戻ることをお勧めしま

す。
只今、欧州編進行中！

プロローグ

プロローグ

??? SIDE

「んっ・・・」

目を開けると、真っ白な空間いた。なぜか、自分の体が浮遊している。手足を見てもなんともない。

「すまないことをした。」

「!？」

声のした方へ顔を向けると、無数の光が集まって人の形を象っていた。外見は地面に着きそうな黒のコートにフードを被って顔が見えない。

「すまないことをした、桜咲 飛鳥くん。」

「!？」

突然、神経が張り詰めて身構える。なぜ、俺の名前を・・・

「あなたは、いったい何者ですか？」

「私は、世界の管理する者。人から言えば、神と言われている。」

今、物凄いと言わなかったか？

「物凄いこと言っていないが？」

心を読まれた！顔が見えないが笑っている。

疑心暗鬼と思いつつ、神様に質問をした

「神様が、一体何の御用ですか？」

「君はなにかの手違いで亡くなってしまい、私の元に居るのだが？」

あれが？散歩している途中に、バナナの皮を踏んで滑って転んだだけで亡くなった？

「本来は転んで軽傷で済むはずが、打ち所が悪くそのまま亡くなってしまったのだよ。本当にすまない事をした。」

「……それだけ？」

「それだけだが？」

「本当に？」

「本当だ」

うわぁー恥ずかしい。ただ、バナナ皮を踏んで転んで死んでしまっただけで生涯終わり。俺は岩男が空気男を倒せない以前の問題か？タイム連打してもたおせない状態か？。缶持って、でもすぐ負けることなのか？

「とりあえず、落ち着けー!!」

「へブーー」

頭に衝撃と空間に鈍い音が響いた、50tと書かれたハンマーを握っている。どうやら、殴られたらしい。

「理解したかな？」

「……………はい」

「あの世に行く前にもう一度生きてみないか？」

「はい？」

今、なんと言った。もう一度生き返る？

「どうかな？」

バナナの皮で滑って終わりの人生って酷くないか？
もう一度、生きるチャンスがあるなら生きてやる！

「お願いします、生き返らせてください。」

「分かった。では、話をしよう」

「とある世界が私の管轄から外れてしまって、手出し出来ない状況になっているのだが。君をその世界に送り、取り戻してほしい。」

「その世界？」

「ある世界の平行世界。」

「ある世界？」

「その名は」

「その名は？」

「マブラヴ オルタネイティヴの世界」

「マブラヴ オルタネイティヴ……………」
知らない世界だ。」

なぜだろう？ ガラスにひびが入る音が聞こえたような……

「……その世界にはBETAと呼ばれる生命体が人類を滅亡の寸前まで追い込んでいる。」

「ベータ？」

「BETAとは人類に敵対的な地球外起源種の略で、1958年に火星で発見され、1967年に月で確認されて襲撃に合い、1973年に地球に侵攻、翌年ユーラシア大陸のほぼ全域を支配することになる。人類は戦術機と呼ばれる人型兵器でBETAに対抗しているが、機体の能力・物量などによって形勢不利になっている。そして君にやってほしいことは、BETAから世界を取り戻すこと。」

「その殺伐とした世界に俺を送り出すと？」

「そのまま、送り出すとすぐに死んでしまうから幾つか力を授けよう。」

目の前に、光が集まって二冊の本になる。手にとって見る、両方の表紙を見ると題名が書かれていない。

「これは？」

「ひとつは、戦術機に関する操縦・開発・整備などの本。ふたつ目の本は、少しの制限はかかるが、君が望む力だ、アニメやゲームなどを具現化することができる」

「俺が望む力？」

「君は何を望む？」

死んだ……破壊、生き返る……再生、別世界へ行く……介入、アレにしよう

「機動戦士ガンダム00をお願いします。」

「分かった。あとは、00に関する拠点・戦艦・機体を選んでおこう。では、本を開きたまえ。」

本を開くと、紙が舞い。体に吸収され、同時に戦術機に関する知識が頭の中を駆け巡る。もう一つの本を開くとMSの操縦、整備が頭の中から出てくる。

「馴染んだ様だね。次は、君自身のことだ。」

「俺自身？」

「年齢は16歳で脳量子波を使えるようにしておいた。」

「なぜ、16歳？」

「その世界にそのままの年齢で送り出すと世界のルールに反してしまうからだ」

「はあ……」

ひし形の青いクリスタルが渡される

「これは？」

「只の御守りさ、首に掛けるといい。」

困惑しながら首に掛ける

「なにからなにまで、ありがとうございます。」

「では、世界と白銀 武を頼むぞ。」

えっ？白銀って、誰？

体が少しずつ光になり、意識が遠のいていった

プロローグ（後書き）

修正しても駄文の道を行います（泣）

第一話（前書き）

修正中

第一話

一話

アスカ side

「知らない天井だ。」

目を覚ますと金属の天井に規則正しく並ぶ照明灯が見え、保健室の独特の匂いがした。ベッドに寝ていたみたいで、立ち上がり鏡を見ると……

「誰！？俺か……」

ドアが開く音が聞こえて振り向くと、オレンジ色の球体が跳ねていた。

「オハヨ！オハヨ！」

「おはよう、ハロ？どうしてここに？」

「サポートスル！サポートスル！」

「よろしくね、ハロ」

「ヨロシク！ヨロシク！」

突然自分の携帯が鳴り出し画面をみると

-メール一通アリ-

件名 神様

ーやあ、着いたようだね。今は1997年の6月で、居る場所はソレストルビーイング号の艦内だ。現在位置は、月の裏側で光学迷彩を展開させながら隠れてBETAからは見つからないので安心してほしい。ソレストルビーイング号の管理はハ口たちに任せている、ヴェーダについては悪用されないように君以外はアクセスが出来ない。機体は最初一機しか使えないが、君が経験値を溜めることにより戦艦・機体・設備・情報が使用できるようになる。経験値については自分で確認してくれ。では、幸運を祈るー

「ドウスル？ドウスル？」

ハ口が俺の周りを転がり始めた

「うーん、まず月から攻略しないといけないか…」

ヴェーダの情報だと、月にハイブは一つしかないが後で厄介になりそうだから先に潰すか。

「そういえば、最初の機体ってなんだろう?」

ハ口を抱えて、自分の記憶に入っている経路をたよりに格納庫に行くと。金色のMAがいた……

「はあゝ 夢見ているのかな」

目を閉じて、開くと。……………金色のMAがいた。

「絶対、夢を見ているに違いない!」

頬を引っ張っても見ても……………金色のMAがいた。

「お、俺の最初の機体は、アルヴァートレか……………!!」

「ドンマイ!ドンマイ!」

あとでロッカールームを見に行ったら、金色のパイロットスーツだった……………勘弁してくれ、泣きたくなってきた

今現在の状況を確認しよう

現在は、地球から見て月の裏側にいる

ソレスタルビーイング号は光学迷彩でBETAに見つかっていない艦内にイノベイドの製造プラントは存在していない、モビルスーツ生産工場はどうゆうわけか稼働できない状態である

ヴェーダは00の世界のデータがなく、各国の情報をハッキングで
きる状態である

戦力はアルヴァートレ、ヴェーダ、ハロでサクロボスコハイブを攻
略しなければならない

「一機だけでハイブ攻略か」

「ドウスル？ドウスル？」

月面に居るBETAは何かいけるけど、ハイブの中が万単位いる
だよな。ヴェーダにシミュレーションしたら、粒子切れで撃墜され
終了という感じだった。気晴らしに艦内に使用できる物を探してい
たら……

「長距離用ミサイル300発あり？」

なんで、置いてあるのだ？

ま、いいやある物は全て使うか……

サクロボスコハイブ付近。宇宙に佇む、金色のアルヴァートレ。

「ふははははははは。」

機体から放出される、金色に近い色合いのGN粒子。

「忌々しい、BETAどもめ。」

操縦席に座る金色のパイロットスーツ、右横の台座に固定され、金色に塗られたハ口。

「この私、アレ。ンドロ・コ。ナーが貴様らを新世界の手向けにしている。」

注意、アスカです。

「アスカ、シュウセイ！アスカ、シュウセイ！」

「ベブーー」

突然、上からタライが落ちてきた。

「お、俺はいつたいなにを？」

「セントウ、カイシ！セントウ、カイシ！」

「やべえ、作戦開始時間じゃないか。」

機首部に装備された主砲を展開し、巨大ビーム砲を撃つ。アルヴァ
トーレから放たれたビームが地上構造物の根元に当たって爆発する。
モニメント

「ちっ、やっぱり破壊は出来ないか。ハ口、監視衛星と地上観測所のハッキングは？」

「オワッター！オワッター！」

「よし、GNフィールド展開。最大全速でモニュメントに向かい、もう一発近距離で打つ。」

「リヨウカイ！リヨウカイ！」

アルヴァトーレの擬似太陽炉がうねりを上げながら前進する。巨大ビーム砲で気づいたのかアルヴァトーレの周囲のゲートからBETAが湧き出てくる。

「うわあゝ気持ちわるゝい、絶対夢に出そう。」

一瞬、寒気がして機体を下げると。さっきいた場所に、無数の光が通る。

光が照射されたほうにモニターで拡大すると大きな目に足がついた、レーザー級がいた

「なぜ、レーザー級がいる？」

ヴェーダの情報では月面にいないと思われていた

夥しいもののレーザーがアルヴァトーレに降り注ぐ、GNフィールドで防いでいるがコクピットは揺れていた

「いいかげんにしろゝモニターは真っ白でわけがわからん。」

すぐさま側面ビーム砲をレーザー級に向けて打つ、遠くに居るレーザー級は射抜かれ倒れていく。近くに居るレーザー級は格闘用巨大アームを展開し、GNフィールドを透過して攻撃する。急いで、数を減らし、モニュメントに近づいて主砲を展開する

「ハロ、ミサイルは？」

「マダ、コナイ！マダ、コナイ！」

今回の作戦はアルヴァトールの巨大ビーム砲でモニメントを破壊させ、シャフトにいるベータに向かって長距離用ミサイルを発射させてからアルヴァトールを突入させ一気にハイヴを攻略する作戦だ
レーダーにBETAの反応がみられた、どうやらのこっていたBETAが後方から来ているみたいだ

「ハロ、GNフィールド解除。解除後にファング展開、後方のBETAを殲滅させる。」

「リョウカイ！リョウカイ！」

粒子の膜が消え、機体後部から6基のファングが展開される。

「この機体のファングは普通の人でも扱えるでね。」

このアルヴァトールのファングはア。ハンドロ・ローナー（普通の人）用に使できるように調整されていた
変則的な動きでファングが射撃する。突撃級は貫通し、戦車級は爆発する。

「ミサイル、キタ！ミサイル、キタ！」

ファングを機体後部に格納する。

「よし、粒子圧縮完了。巨大ビーム砲、いっけーーーーー！」

轟音とともにアルヴァトーレの主砲から巨大なビームが解き放たれる。モニユメントに二発目のビームが当たり、モニユメントが崩れてメインシャフトが現れた。

メインシャフトから溢れんばかりのBETAが出てくる。

「ハロ、ミサイルの射線上から退避する。」

「リョウカイ！リョウカイ！」

アルヴァトーレを上昇させながらGNフィールドを展開させ、メインシャフトを見つめる、メインシャフトにミサイルの雨が降り注ぎ、煙が蔓延する

「ミサイル、オワッター！ミサイル、オワッター！」

「機体損傷なし、粒子残量はまだある。これより、ハイクの内部に突入する。ハロ、サポートよろしく。」

「マカセロ！マカセロ！」

メインシャフトに入ると中はミサイルにある程度、減らしたが横坑からBETAが出てくる

周りにいるベータに構っている暇がないので前方に向けて側面ビーム砲を撃ちながら進んでいく

「こいつら、ウジャウジャと出てくるな。なに？Eセンサーに反応あり？」

「セツキンチュウ！セツキンチュウ！」

モニターを反応している横坑に向けると、何かに飲み込まれた。

「俺はおいしくない！」

「オイシクナイ！オイシクナイ！」

慌ててアームを展開する。前を見ると……………要塞級がいた。

「こんにちはー！」

要塞級が触手を伸ばしてくる、すかさず、側面ビーム砲を撃つ。要塞級を倒し、周りの壁にアームを突き立てる。

「この吐き出せ！ここから出せー」

アームで攻撃しても、沈黙を保ったままなので下に向かって巨大ビーム砲を放った。

アスカ S I D E E N D

——メインルーム——

ただ、一体のBETAがいる。

名前は、重頭脳級

BETAにとって司令官にあたる存在

突然、目の前に巨大なビームが落ちる。そして一体の死骸が落ちた。死骸には、無数の穴が空けられていた。

重頭脳級はゆっくりと触手を伸ばすが、死骸から無数のビームが出てくる。

重頭脳級は慌てて触手を引っ込める、死骸から突き出るように異物が出てくる。

異物は、擬似太陽炉から金色の粒子を放出する。

「ちわーす、三河屋です。重頭脳級さんいますか？」

この世界に送り込まれたイレギュラーが今、重頭脳級に牙を向く

第二話（前書き）

内容は変わっていません、一部修正中です

第二話

第二話

アスカ SIDE

はつきり、言おう。しんどい。心臓は鼓動が早い。息は上がっている。頭から血が出ている。口からは、鉄分臭い。母艦級から脱出する際アルヴアトールは使い物にならなくなった、今はアルヴアロンを操縦している。モニターから無数のエラーと表示され、警告音が鳴り響く。目の前には六目？のBETAが触手をなびかせてこっちを見ている。

「さあ、重頭脳級。お前の罪を数えろ！！」

重頭脳級から無数に伸びる触手、すぐさまGNフィールドを展開するが叩き飛ばされ壁に激突して意識が飛びそうになる。

「GNフィールドごと、殴り飛ばすなんてどんだけの威力だよ。」

「GNフィールド、ハソン！GNフィールド、ハソン！」

「げえ！？」

すぐさま機体を制御して次に来る触手を右や左に回避しながらアルヴアトールの残骸をGNライフルで撃ち抜いて幾つかの触手を爆発に巻き込んだ。

「きりがないな。このままだと、ジリ貧だ。ハロ、粒子圧縮の準備

を！！」

「リヨウカイ！リヨウカイ！」

アルヴァアロンが持つ二挺のGNライフル、ひとつを投げ捨てビームサーベルを構える。無数に伸びる触手を回避したが右足が破壊され、すれ違いさまに触手を何本か叩き切ると、重頭脳級はすぐさま触手を引っ込める。

「ハロ、粒子圧縮は？」

「カンリヨウ！カンリヨウ！」

残っているGNライフルを構え、翼を機体の前方に展開する。重頭脳級は危険を感じて再び触手を伸ばす。

「気づくのが、遅い！」

アルヴァアロンからアルヴァトーレの主砲に匹敵する程のビームが放たれ、重頭脳級を飲み込んでいく。煙が晴れると大広間には大きな穴と火花を散らしてボロボロなアルヴァアロンがいた。

「ハロ……あとは頼む……」

「リヨウカイ！リヨウカイ！」

ハロに言いたい事だけを言ったら意識が途切れた……………
携帯からメール着信音が鳴り響く。

―メール一通アリ―

件名 お知らせ

―桜咲 飛鳥 様、ハイヴ攻略、おめでとうございます。経験値が一定の量に達しましたのでメールでお知らせします。使用できるものは、ソレスタルビーイング号艦内に置いてありますので確認をお願いします。-

アスカ SIDE END

アメリカ SIDE

―サクロボスコハイヴ攻略後、後日。ホワイトハウスのとある会議室―

アメリカというあらゆる重鎮たちが今後のことを話し合っていた。

「第五計画は順調かね？」

「はい、タイムスケジュールは、予定道理進んでいます。」

「では、そのまま続けたまえ。」

「はっ！」

大統領は議題の話し終わり席を立とうとしない、回りの重鎮たちが不思議に思い、一斉に大統領を見る

「諸君、最後は、月についてだが？」

会議室にいる全員が困惑する。

ある日突然、月のハイヴが崩壊していた。各国は至急、監視衛星・地上観測所を使い調べたら、何も分からなかった。学者たちが色々な仮説を立てた、ある科学者は隕石が落ちてハイヴが崩壊したとか、違う科学者はBETAが何らかの目的で破棄したなど。

「大統領、月に関しては、現在調査中。全ての観測所などを使い監視を強化、ラグランジュ点については警戒態勢にしておきます。」

「我々、CIAは各国にいるエージェントに動きを探っています。」

「うむ、任せたぞ。」

「「はっ！」」

アメリカ SIDE END

夕呼 SIDE

―とある研究室―

部屋の周り本棚には、色々な分野の本が並べられ、真ん中においてあるデスクの上は紙の束。椅子に座る女性は只一枚の紙と睨めっこしている。

「…なによこれ、月のハイヴ崩壊？原因は一切不明。一部の科学者からはBETAが廃棄したと憶測されるですって…！」

冗談じゃない。こっちは、何個もハイヴが出来ているのに、前触れもなく月のハイヴが落ちるなんて…

「絶対に原因を探し出してやる…！」

資料の紙が宙に舞うが関係ない、電話の受話器を乱暴に手に取り、ある場所へ電話を掛ける。

「もしもし、私よ。今からサクロボスコハイヴの映像を至急送って頂戴！！はあ？研究機関で調査しているから無理ですって…！！いいから送りなさい、こっちは権限を持っているだから…！！」

隣から怒鳴り声が聞こえ、研究員は今日も残業かな～と思いつつ、ため息をつくのであった。

夕呼 SIDE END

アスカ SIDE

目が覚めると集中治療用カプセル中にいた、数週間眠り続けていたらしい

体を見ると傷口が綺麗に消えていた

「すごい、医療技術だな」

手を握り返し感心しながらヴェーダの情報を閲覧して格納庫に向かう格納庫にはカレルたちが作業をしていてある一画の所に視線を向ける視線の先には動かないようにワイヤーに固定されているアルヴアアロンがいた

「完全に壊れたな……………」

「ツカエナイ！ツカエナイ！」

GNDドライブとコクピット以外は使い物にならない。

「よくもまあここまで持ったな」

地球に行く際、ばらして持って行こう。戦術機の開発に役立つかも知れない。

「しかし、さっきの夢は、いったい？」

手術台に手足を縛られ、白衣を着た紫色の髪の女性が獲物を見るように笑いながらメスを近付けてくる。口は何かを押さえられ喋れない、メスが頭に触れた瞬間……

—END—

と言う、夢だった。思い出すだけでも身震いがする。

「いやいや、心の奥に締まっておこう。」

手元にある端末機を操作し、コンテナを開ける。

「じつ、こいつは—」

コンテナの中には重装甲なガンダムがいた……………

「GN—005 ガンダムヴァーチェ、きた——」

重装甲砲撃型で、常識外れの攻撃力と防御力を両立された機体。しかも、オリジナル太陽炉搭載型……………ちよつと待て——！今、思うにこの世界でGN粒子を撒くのはばくないか。GN粒子は通信とレーザーを妨害してしまう。絶対、戦場を混乱させる。

あれ？擬似太陽炉の方がかなりやばくないか？世界を私色に染める男が渡したの毒性があるやつじゃないか？

神様は、俺に世界を破壊させるつもりか？

端末機に送られる情報を見る

―調査 結果 G NドライブT 毒性 ナシ―

「はあゝ毒性なしでも通信とレーダーがなあゝ」

上を見上げると青と白を基調する戦艦 ―ブトレマイオス2―
ブトレマイオスの後継艦で戦闘を意識して開発しており、大気圏内
外と海中を移動できる万能艦。あの宇宙戦艦に劣るかもしれないけ
ど。

「ハロ、ヴァーチエ搭載後、G Nドライブをトレミーに接続。白ハ
ロ、赤ハロはトレミーのチェックを」

「「「リヨウカイ！リヨウカイ！」」」

「で？あれはなに？」

トレミーの格納庫に3つのコンテナが収納されていた。コンテナの
中身を確認するため、端末機を操作するが反応がない

「とりあえず、ここには当分帰ってこないから使えるものだけ持っていくか。」

今のソレスタルビーイング号ではヴェーダと使える戦艦と機体だけ。使える資材と日常雑貨をトレミーに積み込み。大気圏突入の情報を見る。

「この前、戦闘で世界が騒ぎ出したから普通に行けないな。」

衛星、地上観測所の監視強化してもこっちはヴェーダがある………今回は使わないで行こう。なぜか、寒気がする。

なにか、廃棄ステーションを破壊して一緒に降りるか。

1997年12月

―大気圏外―

「トレミー、第一デッキを開放。ヴァーチェをカタパルトデッキへ。機体固定、確認。射出タイミングをトレミーからヴァーチェに譲渡、確認。」

全システムをチェックする、問題はなし。

顔を上げ、目に映る世界を見る。絶望から必死に抵抗する世界。自分を落着かせるように深呼吸をする。

―白銀 武を頼むぞ―

あの時、言われたことが妙に引かかる。ヴェーダの情報だと、この世界に生きている人だ。なぜ、神様は俺に白銀 武を頼んだのか分からない。この世界と白銀 武に何かあるのか？手出し出来ない理由もそこにあるのか？いやいや、考えるのはやめだ。今は、できる限りのことをしよう

「ヴァーチエ、アスカ・サクラザキ、世界に向かって飛翔する。」

第三話（前書き）

まだ、修正が続きます

第三話

第三話

アスカ SIDE

1997年12月

1961年、世界初の宇宙飛行を成功させた。当時のパイロット、ユーリイ・ガガーリンはある有名な言葉を言った。

―地球は、青かった。―

今の俺にも言える。

―地球は、赤かった。―

ヴァーチェが大気圏に捕まり、空気の摩擦抵抗でEカーボンが焦げかかっている。モニターから見えるのは、破壊したステーションの残骸が地球に向かって落ちていく、トレミーはその後を追う。

「サクセン、セイコウ！サクセン、セイコウ！」

「そうだな。」

「オチテル！オチテル！」

「そうだな。」

「ミトメタクナーイ！ミトメタイナーイ！」

「そうだな。」

「キアイ、イレロ！キアイ、イレロ！」

「そうだな。」

「デンパ！デンパ！」

「そうだな。」

状況を確認しよう、地球に降りる際、廃棄されたステーションをヴァーチエで破壊して残骸と一緒に大気圏突入するはずがトレミーに戻る時に破壊したステーションの破片が当たり、単機で大気圏突入が始まった……これ、まずくね？

「GN粒子、最大散布開始！機体前方に展開！」

機体を制御しながら落下地点を見る

「何処に落ちる？朝鮮半島付近？」

太平洋に落ちるトレミーからかなり遠いな、後で合流しないと……

「ハロ、最後なにか言わなかったか？」

「キニスルナ！」

アスカ S I D E E N D

大東亜連合軍衛士 S I D E

1998年1月

夢でも見ていたのだろうか？

BETAから現地の住民を避難させようとするがBETAの群れがこちらに向かって来る。CPに支援の要請をするため、通信を試みるが………

「CP！CP、応答せよ！通信が繋がらない？」

「隊長！リーダーが使えません！」

外部スピーカーから部下の声が聞こえてくる

「なんだと！」

リーダーを見るがばやける

「隊長！BETAが来ます！」

「ちっ、各機、兵装自由、迎撃開始する！」

「了解」

突撃砲を構えるが、突然横から巨大なピンク色の光が襲い掛かる、眩し過ぎて思わず目を閉じる、再び目を開けると目の前には半円状の溝が出来ていった。

「今のは、いったい？」

「た、隊長、BETAの数が減っています！」

「な、なにー！」

目の前を見ると先ほど居たBETAの群れが5割減っていた。

「隊長、こちらになにか接近します！」

「な、なんだ、アレは！？」

こちらに向かってくる機体は、重装甲で機体の周りに緑色の膜が覆われていた。

大東亜連合軍衛士 SIDE END

アスカ SIDE

BETAと軍からかなり離れたところに落ちたらしい。すぐに機体

を隠し、トレミーが来るまで待機していた。この数日間、コクピットの中で新年迎え、通信を傍受したら『俺、帰ったらあの子と結婚する……』、『これが終わったら一緒に酒を飲みに行こう……』とか、聞こえてくる。これって死亡フラグって言われているよね？新年早々そんなの聞きたくない！

―折るか？今すぐ、壊すか？―

「ツウシン、ボウジュ！ツウシン、ボウジュ！」

「また、死亡フラグか？」

通信を聞いてみる、どうやら脱出を拒む住民の避難が終わっていなかったらしい。すぐ近くにBETAの群れが近づいて来る。

「ドウスル！ドウスル！」

「俺には関係ないけどね」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

ハ口、つぶらな瞳でこっちを見ないで……

「べ、別にあなたのために、やっているわけじゃないのだからね！

「！」

すぐさま、ヴァーチエの外壁部迷彩皮膜を解除し、射撃地点に移動する。GNバズーカを両手で構え、胸部にGNバズーカを連結させ銃身を展開する。

「粒子圧縮開始、50、60、70、80、90、粒子開放」

GNバズーカから巨大質量のビームが放たれ、機体が後方に下がる。撃ち終わった後には、地面に、半円状に抉られた跡が出来ていた。

「味方に当たった？」

「ハズレタ！ハズレタ！」

よかった！人が死ぬのは勘弁してくれ、BETAは5割ほど、居なくなっただけ。あれ？なにか、忘れてないか？物凄く、厄介な、物を

……

「あゝ！？GN粒子——！」

やべえ………散布しちゃった、レーダー・通信妨害、戦場混乱………

「ハロ！GNフィールド展開！」

「リョウカイ！リョウカイ！」

残りのBETAに向かって機体を最大全速させる。体にGが掛かるが今は関係ない。

「間に合え、間に合ってくれ!!」

アスカ SIDE END

彩峰 SIDE

「CP、応答せよ! いったい、何が起きている?」

BETAから現地住民を避難させるため、部隊が送り込まれたが連絡がない……我々が向かうにも国連軍司令部にBETAの群れが接近され、身動きが出来ない。

「こちらCP……えっ? うそ! ありえない!」

CPの女性が驚愕しながら通信が入る

「どうした?」

「BETAが……」

「BETAが?」

「こちらに接近するBETAの一部が消失しました……」

「支援砲撃ではないのかね?」

「いえ、彩峰中将、支援砲撃ではありません。」

「いったい、なにが起きているのだ。」

彩峰 S I D E E N D

アスカ S I D E

どうやら、間に合ったらしい、安堵させつつ、ヴァーチェの両肩後方に装備されたGNキャノンを展開させる

「これより、殲滅する」

BETAに向かってGNキャノンを発射する、4つのビームが突撃級と要撃級に当たり爆発する。

戦車級が近づくがGNビームサーベルで斬る。

レーザー級はレーザーを照射しようとするが撃てない、なぜならレーザー級とヴァーチェの間に要撃級が居る、BETAたちは同士討ちを避けたいのか分からない、そこに透かさずGNバズーカを撃つ、兵士級など巻き込んで爆発した。

要塞級が触手を突き出してくる、GNフィールドで防いでGNバズーカを構えるが一瞬ある所に目が移動する。

「金属が溶けていく、あれが強酸性溶解液」

触手をGNフィールドで防いだ時に周りに飛び散って色々な物を溶かしていく。

「アスカ！アスカ！」

「!？」

気づいた時にはGNフィールドごと吹き飛ばされた。

「ニヤリ」

GN粒子の質量軽減効果で機体を軽くして後ろに飛ばしてもらった。空中で機体の制御をしてGNバズーカとGNキャノンと同時に発射させ、要塞級を撃ち抜く。

「徹底的に潰させてもらっぞ、BETA」

アスカ SIDE END

彩峰 SIDE

BETAから国連軍司令部を防衛し、支援のために現地の住民を避難させている部隊の元に急ぐと、そこには、一機の戦術機がBETAに立ち向かって行く。あの戦術機は明らかにおかしい……見た目は、強固な装甲で背中から緑の粒子を放っているがあの機体は跳躍ユニットなしで浮遊している

「彩峰中将、あの戦術機、浮遊いませんか？」

「私にも、浮遊しているのが見て分かる。」

浮遊している戦術機は両手に持っていた大砲をBETAに向けてピンク色の光を放った

「レーザー!？」

要撃級が近づいて前腕を振り下ろす、避けようせず右手を挙げた。すると要撃級が真二つに割れた。右手を見るとピンク色の光の剣を持っていた。

「なんなのだ？あの戦術機は？」

見える範囲のBETAを全滅させると、こちらに機体を向ける

彩峰 SIDE END

アスカ SIDE

「これでラストー！」

GNバズーカで残りのBETAを一掃する

周りには、サソリの尾が顔みたいで歯を食いしばったやつ？突撃しか能のないやつ？三つの胴体？赤いやつ？以下略のやつらの死骸が散乱する。

呼吸を整えながら部隊を見ると

「やっと、終わった…味方は、減っていないよな？え！増えている!？」

『こちら、帝国陸軍所属、彩峰萩閣中将だ。支援を感謝する！貴官の所属を答えよ』

外部スピーカーから声が聞こえてくる。

「えゝ！？」

まずい、GN粒子を散布して通信・レーダー妨害、戦場への無断介入。この世界では、所属不明機だ。どうしよう？

『？……通信が使えないから外部スピーカーを使い！』

なにか、言い訳を考え出さないと………あつ閃いた！

『すみません！守秘義務のため所属を明かすことが出来ません！機体についても極秘なので、お願いします！』

『………分かった、せめて名前だけでも、教えてくれないか？』

うゝん、名前だけならいいよな？

アスカ SIDE END

彩峰 SIDE

『アスカ……桜咲 飛鳥です！では、失礼します！』

若いな、16、17辺りか？

目の前の戦術機が上昇を始め、緑の粒子を出しながら飛び去っていく。

「ま、待てレーザー級が居るかもしれない！すぐに下降しろ！」

「彩峰中将！レーザー級、反応ありません。」

どうゆうことだ？さっきまで使えなかった通信・レーダーが正常に戻っている。

私は、呆然とあの機体の軌跡を見るしかなかった。

第四話（前書き）

内容が変わらない駄文です

第四話

第四話

アスカ S I D E

「これからどうするかな？」

苦笑いさせながらモニターを見る。前にはBETAの群れ、軽く千を超えているようだ。

後ろはGN粒子のせいで軍が混乱しているだろう。これ以上、混乱させるわけには行かない
深呼吸をして自分を落ち着かせ、操縦桿を強く握り、真直ぐ前を見る。

「ハロ、戦闘開始だ」

「リョウカイ！リョウカイ！」

BETAに向かってGNバズーカ、GNキャノンと同時に撃つ、何十体は打ち抜いて群れの中に穴ができた。すぐさま、GNフィールドを展開させ、その穴に向かって前進させる。

レーザーが照射されるがGNフィールドに阻まれる

「しつこい、無視だ！」

要塞級が触手で攻撃するが機体を下降させ、回避しながら要塞級の下を潜り抜ける

機体を回転させBETAの群れを抜けてGNバズーカを発射する、同時に機体の制御を無くして、GNバズーカの反動で後ろに向かって飛んで行く。

BETAは転進してヴァーチェに向かって前進を始める。

「ツラレタ！ツラレタ！」

「よし！このまま逃げるぞ」

今回はBETAの習性を利用してもらう。

BETAは、コンピュータの能力がより高い順に優先的に狙っていくらしい、そこでヴァーチェを餌にして軍から反対の方向に逃げる。一定の距離を保ちつつ、幾つもの山を越えトレミーの合流ポイント付近にたどり着く

「合流ポイント近くに港町？」

モニターで拡大してみると………BETAによって破壊された港町だった。

言葉で言い表せば 理不尽と言えいいのか？

至る所に大量の血痕、人だったと思わせる亡骸が散乱していた……

「なんだよ……これ……」

喉が絞まるように苦しく、目の焦点が合わない、体温が下がっていき、手足の感覚がない
心が引き千切られそうだ。

「ゲホッ、ゲホッ」

思わず吐いた、少しでも気持ちが悪くなるように…

「アスカ！アスカ！」

「ハア、ハア、大丈夫…」

胸糞悪い、これがBETAの被害、理不尽でもほどがある
突然、警告音が鳴り響く、どうやら、BETAが追いついてきたようだ

ゆっくりと深呼吸させ、もう一度モニターを見て黙祷を捧げる
機体のスピードを徐々に上げて合流ポイントに向かう。

「トレミーは！？」

海上を睨みつけながら旋回をすると海の中からトレミーが浮上を始め、第一デッキが開放されていく。

「白ハ口、ヴァーチエ収容後、緊急潜水」

「リヨウカイ！リヨウカイ！」

ヴァーチエをハンガーに固定させ急いでブリッジに入り、モニターを見る。

BETAの追撃を振り切りみたいで軍は混乱もなく撤退したようだ。

「白ハ口、あとはお願い」

「マカセロ！マカセロ！」

ハ口たちにすべて任せ、自分の部屋のベッドに泥のように眠った

数日後

モニターを見つめながら考える

今ある戦力は、ヴァーチェとトレミーだけ、ハイヴは落とせるか怪しい。

また、BETAと軍に介入しても通信とレーダーが妨害して混乱を起こしてしまう、さらにGNドライブとかの技術はこの世界にとつてオーバーテクノロジーでどこかの国に目をつけられ、行動がされにくくなるのは、厄介だ。

なにか、バックアップがあれば……………

端末機を操作しているとある資料が目に残る

―オルタネイティブ 第4計画―

アスカ SIDE END

夕呼 SIDE

―帝都大学―

私は受話器に耳を傾けながら門兵の話を聞いていた。

「サクラザキ…アスカ？」

「はい、香月博士に面会をしたいと言っております。何か心当たりなどは？」

「…悪いけど、予定にも記憶にもないわね、追いついて頂戴。」

「いえ、それがですね、『香月博士に4番目、00、脳と伝えれば分かります』と言っているのですが…」

「!？」

どうゆうこと？なぜ、最高機密を知っているの？

私は肩と耳に受話器を挟め、パソコンで戸籍情報を探してみると見つからない、苗字を探してみるが、桜咲という苗字が存在しない……

「香月博士？」

「…私の所に案内して」

夕呼 SIDE END

アスカ SIDE

此処までくるのに検査などさせられ、やつと応接室に案内された。検査している時になぜか頭痛になったりして大変だった。しかし……

――監視されている――

顔を動かないで視点を横にずらす、部屋の四隅に監視カメラが四台、隅にある観葉植物の所に一台。

相当、警戒されているな。こちらは、第四計画のことだったからしようがないけど、交渉させるにはこちらに引っ張り出すしかないな。応接室のドアが開かれ、一人の女性が入ってきた。あれ、記憶の奥が騒ぎ始めたぞ？

「…あなたが、桜咲 アスカ？」

「初めまして、香月博士。俺は、桜咲 アスカです」

「桜咲 アスカ、あんた、いったい何者？」

「気がついたらこの世界に居たという、異世界人ですよ。」

「……………」

なんか、まずいこと言った？

「…ふ、ふふふふ…」

壊れた？

「あー……っ、はっはっはっはっはっはっ！！」

「あの〜香月博士……？」

10分後

俺は、この世界に来てからの経歴を話した（一部、嘘を入れて）

さすがに、GNドライブについては驚いていた、半永久機関で光学兵器・機体制御などが使えるからである

ヴェーダについては00ユニットと同じ量子コンピュータで設計図をコピーしようとしたが出来なく、只のハッキングが出来るコンピュータと言って説明をした

「アスカ、あんた月を落としたのね？」

「そうですね、サクロボスコハイヴは攻略しましたが、機体を大破させました」

「他に機体は残っているわよね？」

「使えるのは一機と戦艦だけで、あとは制限が掛かっています。」

「制限ってなによ？」

「この世界に来たときにメインシステムが故障してしまい、未だに普及されていなくて使用できる機体が少ないですよ（嘘）」

経験値って言ったらどこかに飛ばされ強制労働させられるかもしれない……

「ち、使えないやつ」

「酷い！」

「ま、いいわ！私の方で戸籍とか、用意しておくから、後日来なさい」

「あつ、はい、また後日来ます」

大学の校門を出て振り返る。

香月博士の話している時に何度も頭痛がした、普通の頭痛ではなく、何かに見えないように本能が働いた

「あれが、リーディングか……」

周りに人が居ないことを確認して腕時計のあるスイッチを押す。

「ハロ、警戒レベルを一つ下げて、ヴァーチエの攻撃を停止、これから帰るから周りの警戒よろしく」

『リヨウカイ！リヨウカイ！』

もしものために、ヴァーチエを用意していたが今回は使わずに済んだ

アスカ S I D E E N D

アスカが出て行った後、応接室にウサギ耳のカチューシャをした銀色のツインテールの女の子が入ってくる

「社、どうだった？」

「…はい、見えませんでした」

アスカが検査されている時、社 霞がリーディングを行ったが見えなかった、困惑しながらも、霞にリーディングを続けさせた

「やはりね…」

夕呼は、手元にある資料を見る、アスカの検査の結果が載っていた

―桜咲 飛鳥 解析不能―

アスカ SIDE

―プトレマイオス?―

「あゝ!?!」

心の奥に閉まつたはずの悪夢が出てくる。

「解剖させられる――――――!」

「アスカ、シュウセイ!アスカ、シュウセイ!」

「へブ――――――」

こゝ今度はなに…?

目の前を見るとタライがあつた……

「また、タライ?」

タライの中を見てみると紙が貼り付けてある

―桜咲アスカさま、経験値が一定に溜まりましたので一部制限の解除をお知らせします―

「え、携帯じゃないの？普通に教えてよ――――！！」

第五話（前書き）

一様、修正が終わりました

第五話

第五話

アスカ SIDE

―帝都大学―

香月博士に呼び出され、研究室に入ると至る所に資料が山積みになっていた。

「香月博士、来ましたよ」

「…待っていたわ。」

手元に封筒が渡され、中身を見ると戸籍情報に関する書類と頼んでいた資料が入っていた。

「お、戸籍が出来ている」

「…じゃあ、いくわよ」

「何処に？」

「あなたの操縦技術を見にね」

「？」

言われるまま、着いて行くと強化装備を渡され、シミュレーターに乗せられていた

『さあ、始めるわよ!』

「香月博士、この強化装備、サイズ間違っていないませんか?」

強化装備って伸縮性に優れていなかったか?

さつきから強化装備が尻に食い込んで股間が痛い!!

『アスカくサイズ、間違っていないわよ』

にやけながら通信を入れてくる

―絶対、わざとやっている―

網膜投影システムから送られる情報を見る、自分が乗っている戦術機は激震で装備は強襲前衛。場所は廃墟化した町。BETAの数が200?

「あのく香月博士、準備運動は?」

通信を入れてみるが繋がらない、もう一度、通信を入れてみても繋がらない

「……………準備運動は無しかよ!」

激震を動かそうとすると感覚が鈍る。

反応が遅すぎて倒れそうになり、制御をしようとするが操縦が効かない。

「なんで？」

激震が跳躍ユニットを吹かせながら勝手に受け身を取る

「やりづらい、機体だな！」

突撃級を避けながら戦車級に向かって87式突撃砲を撃つ、周りに闘士級などが集まってくるが正確に射撃をして次々と倒していく残っている突撃砲が弾切れになり捨てて長刀を構え要塞級に向かって機体を加速させていく

「やべえ、金。が苦しくなってきた」

アスカ SIDE END

夕呼 SIDE

わたしは、驚いていた。

始めはぎこちなく動いていた激震が時間が過ぎることに滑らかに動いてBETAを徐々に減らしていく

突撃級が突撃をしてくるが横に回避して突撃砲を撃つ

要塞級が攻撃をするが左肩に掠りながら長刀で足を切り、胴体を叩き切る

レーザーが照射されるが跳躍ユニットを使い無理やり機動を変え接

近して短刀で切り裂く

戦車級が取り付くが蹴り飛ばして短刀で刺し殺す

全てのBETAを全滅させ、通信が入る

『お、終わりました』

「まさかここまでやるなんて思っても見なかったわ。アスカ、研究室に来なさい」

『了解』

夕呼 SIDE END

アスカ SIDE

強化装備から私服に着替えて頼んでいた資料を見ていた、資料に書かれていたのはレーザー級のこと、1973年4月に人類の航空戦力にBETAが対抗するためにレーザー級が出現した、現在に至るまで月にはレーザー級の存在は確認されないと書かれていた。

どうゆうことだ？俺がサクロボスコハイヴを攻略する時にレーザー級が存在していた、BETAが俺という存在に気づいて月にレーザー級を出現させたのか？それとも、俺が来てしまって変わってのか？困惑しながら研究室に向かった

研究室に入るとウサギ耳のカチューシャした銀色のツインテールの女の子がいた

―たしか、この子は……―

「…アスカ、あんた幼女に欲情する趣味があるわけ？」

香月博士こつちを見ながら退いていく

「そんな趣味ありませんよ！」

「目が血走っていたわよ」

「いや、血走っていませんよ」

ため息をつきながらも女の子に視線を向けると頭痛が始まる

「初めまして、俺は、桜咲 アスカ、君の名前は？」

「霞…社霞…です」

「ごめんね、リーディング出来なくて」

「!？」

あ、警戒させちゃった…

「…アスカ、あんたもESP能力者？」

「違います、俺には脳量子波と言われものがあり、リーディングを
阻害したと思われるのですけど」

「脳量子波？」

「脳量子波とは特殊な脳波のことで脳量子波を発生させることで空
間認識能力・攻撃回避能力・反射能力が高くなり、高い戦闘能力が
得ることができるのですけど、俺のは不完全なので高い戦闘能力が
得られていないのです」

苦笑いしながら香月博士を見ると両手にメスを持っていた……

「解剖していい？」

「断固辞退させていただきます!!」

「ちっ、いいわ。アスカ、データ持って来たわね？」

安堵しながら持ってきたバックからハ口を取り出してパソコンに繋
げる

「この球体はなによ？」

「俺の相棒で名前はハ口と言つのです、色々とサポートしてくれま
す。」

「ヨロシクネ！ヨロシクネ！」

香月博士は、呆然としながら八口を見つめていた

「香月博士、データ出ましたよ」

モニターに出されるのはこの前、制限が解除されたユニオンのフラッグの情報だった

「…アスカ、これ空中戦使用よ、レーザー級に打ち落とされるわ」

「いやいや、空中戦しませんよ」

「どうゆうこと？」

「こいつのフライトユニットを戦術機に転用するつもりですけど」

ユニオンのフラッグは空中戦に特化した機体だ、しかしこの世界での空中戦は危険なのでフラッグのフライトユニットを戦術機に使わせてもらう、フラッグのフライトユニットは水素に大電流を流すことにより……（長い説明になる為、省きました）

「フライトユニットの燃料は水素で機体のカーボン製フレームの炭素分子結合体内に分子レベルで注入されて、爆発などの危険性はなく、燃料タンクを装備する必要がないです」

「アスカ、このソニックブレード（プラズマソード）ってなによ？」

「それは、ソニックブレードにプラズマを発生させることによってプラズマソードとして使用できるですよ」

ハムさんの所の技術、すげー

「あんたの世界は、凄い技術を持っているわね……」

幾つか話し合った結果、フライトユニット・フラッグの武装・Eカーボン・通信・レーダーなど採用することになった

OSについては、機体の硬直などを任意にキャンセルするよう設定して電子機器の負担は、自分が今使える技術を転用させ、機体の即応性が少し上がった

とりあえず、通信・レーダーは早めに実用化されるらしい。

フライトユニットは戦術機に装備させられように一から設計し、リアライフルなどについては実物がなかったため、データの設計図を下に戦術機が使えるようにしなければならぬ。

不意にあることを思い出しあることを聞いてみる

「あの書類どうなりました？」

「…それは、今来るわよ」

ドアがノックされ隣部屋の研究員が入って来て書類を香月博士に渡された。

研究員が出て行くときに頭の上に天使の輪？と天使が見えた俺は夢でも見たのか？

頬を抓るが痛い、現実だ

書類・IDカード・ドッグタグが渡される。

「時間が掛かったけど、終わったわ」

書類を見ると…

「桜咲 アス力を少佐に任命する……俺が少佐？」

「あんたは、開発ができるし、衛士の腕も高い、さらに使用できる機体が増えていくから動きやすいようにしといたわ」

「なるほど」

「あと、ヴァーチエは使用禁止ね」

「アメリカですか？」

「…そうよ」

今は日本帝国とアメリカは条約で結ばれている。もしもヴァーチエが公になったら、アメリカが条約をたてに、帝国に不利な条件でヴァーチエを接收するつもりだろう。

ヴェーダを使ってアメリカの情報でも掴んでおくか……

「それじゃ、乗れる機体がないですよ」

「来週中に激震が搬入させておくわ」

「帝都大学に!？」

「此処しかないでしょ、トレミーはだめよ、見つかったら言い訳ができないから」

トレミーにかなりの設備が揃っているのに、今回はしょうがない。

アスカ S I D E E N D

帝都 S I D E

煌武院悠陽殿下を中心にある話がされていた

「緑の粒子を出す戦術機ですか？」

「はい、光州作戦中に緑の粒子を出す戦術機が我々を助けてくださいました」

「彩峰中将よ、その戦術機について何か分かっておらぬか？」

紅蓮大将の問いかけに彩峰中将はその戦術機のことを思い浮かべる

「衛士の名は、桜咲 アスカと名のついていました」

「桜咲…アスカ…」

「おや！そういえば、最近、帝都大学を出入りしている青年も同じ名前でしたね」

一同が壁に寄りかかっている鎧衣課長を見る

「本当ですか？」

「ええ、香月博士の所で何度か見掛けましたね」

「ですが殿下、桜咲という苗字は古くから存在しておりません」

月詠中尉が資料を見て険しい表情を浮かべる

「ほう、存在しない苗字とは、不思議なことあるものだろう」

「鎧衣課長、あなたには彼の調査をお願いします」

「わかりました、殿下」

第六話

第六話

アスカ SIDE

1998年6月下旬

― 帝都大学 倉庫 ―

後日、大学が管理する倉庫に87式自走整備支援担架ごとが搬入された。

シートを取り外すと激震がいた。

始めにコクピットの周りを弄ってみた、強化装備の網膜投影システムはそのまま採用して八口に火器管制・機体制御できるように接続用の台座を作成した

跳躍ユニットは試作品の水素プラズマジェットを作成して腰に装備したが大きすぎるためか、ブレードマウントが装備できなく、ガンマウントを装備することになった。

装甲はまだEカーボンが製造されていないため、そのまま使うことにした。

武装はリニアライフルとソニックブレイドの試作ができたがプラスマソードも一緒に作ろうとしたがプラスマ発生装置が今の技術で激震に搭載できないことが分かりソニックブレイドまでしか作れなかった

思っている以上に開発が進まなく何日も大学に泊り込み、念のため完成させといった

試作のOSをインストールしていると倉庫に足音がして気がついた

「アスカ！生きていますよ？」

仰向けに固定されている激震のコクピットから顔を出すと香月博士と社がいた

「ちゃんと生きていますよ」

「ちえ、死んでたら解剖できるのに……」

香月博士は子供のように不満な表情を浮かべて飲み物を飲んでいた

「解剖しないでいいです！……って、それは俺が持ってきたポ。リスエ。ト！？」

「いいじゃない、別に減るものじゃないし」

最近、妙にペットボトルの数が減っているのは、あなたですか！

「…飲み物…です」

「あ、どうも。」

社から飲み物を貰い、飲みながら激震を見つめる
見た目は、跳躍ユニット以外は変わらずそのまま

「で？これは出来たの？」

香月博士は激震に向かって指を差す

「大体は、完成しています」

「大体は？」

「武装の試験がまだ終わっていないんですよ、どこか試験できる場所があればいいんですけど」

「じゃあ、白陵基地にいくわよ」

「帝国軍の白陵基地？」

「そこに本部を移設するから、色々と自由に使えるわ」

たしか、日本が第四計画を招致して各地の基地を国連太平洋方面第
11軍に開放した基地のひとつだったな…

「いつ、移設するんですか？」

「六月の下旬に移設するわよ」

あれ？今って六月の下旬で……………下旬！？

「今から移設するんですか！？」

「そうよ、今から移設の準備が始めるから荷物よろしく」

紙が渡され、見ると大量のオルタネイティブ4の関係する書類が書いてあるリストだった

「これを一人で？」

香月博士の方に顔を向けると居なかった

「香月博士？……………逃げたな」

ため息をしながら落込んでいると、袖が引かれて社を見る相変わらずの暗くて薄い青の瞳がこちらを覗き込むように見ている

「…頑張ってください」

「……………はい」

社が倉庫から出て行き、もう一度リストを見ると紙が張り付いて二枚だったらしく、裏を見ると目が点になるほどのおびただしく書かれたリストがあった

「あの人は絶対、めんどろなことは、やりたくないんだな……………」

「アスカ、カンバ！アスカ、カンバ！」

応援してくれるの社と八口だけだな……
気持ちを切り替えて倉庫のドアを開ける

「応援に応えますか！」

三日ほどかけてリストに書かれた書類をすべて軍用ドラックに積み込み

研究室にいる香月博士の下へ行く

「書かれたリストの書類、全て積み込みが終わりましたよ」

言いながらドアを開けるとおびただしい資料の山がなく、綺麗さっぱりとして夕日に照らされた研究室が目の前に広がる

「……ずいぶん、早かったわねえ、激震はいつ白陵基地に移送するの？」

「明後日には、移送できそうですね」

「明後日？明後日って西日本に台風が接近してくる日じゃあない？」

「台風が来る前に移送したかったですけど、トレミーを隠蔽する場所に手間取って明後日、移送しますよ」

「…それじゃ、わたしと社は、先に行っているわよ」

「はい、分かりました」

香月博士が研究室から出て行き、窓から空を見る

「しかし、いやな夕日だな」

雲ひとつなく、夕暮れに映る太陽は血の様に赤かった……

アスカ S I D E E N D

帝国軍 S I D E

1998年7月、大規模のBETAが九州沿岸部に上陸、遅れて中国地方日本海沿岸部に上陸したBETA群との挟撃に合い、本土防衛軍西部方面軍が壊滅し、BETAの上陸から約一週間で九州・中国地方を制圧されていた、さらにBETAによる大陸地形改造の影響で超大型化した台風の影響で海上戦力の展開ができなく、陸軍による住民の避難が急がれていた

『こちら、工作部隊、巨大橋群の爆破は失敗に終わった、繰り返す、

工作部隊……』

大雨の降る中、彩峰中将は通信を淡淡と聞いていた
側面支援の拠点となる四国も巨大橋群の爆破の失敗に終わり、此処
にもBETAが侵攻してくるだろう

「彩峰中将、この地区の住民の避難は完了しました」

「ご苦労、CP、他の部隊は？」

『こちらCP、彩峰中将、大半は終わっていますが、沙霧大尉の部隊が離脱していません』

「沙霧の部隊が？」

『はい、住民の避難が終えたのですがBETAが接近してしまい、今は交戦中です』

「了解した、各機これより、部隊を再編成しつつ、沙霧の支援に回る」

『『『了解』』』

彩峰中将は飛躍ユニットを噴射させながら沙霧大尉の元に向かった

沙霧大尉は焦っていた、住民の避難が終わり、自分たちも撤退をする矢先にBETAの接近を許してしまったことを

「く、数が多すぎて離脱ができません」

87式突撃砲で牽制したが数の暴力には勝てず、少しずつ不利になっていた

突然、リーダーに友軍機の反応があり、通信が入る

『こちら、彩峰。沙霧大尉、応答せよ！』

「彩峰中将！なぜ此处に？」

『沙霧大尉、撤退をしていないのは、君の部隊だけだ』

「ですが、こちらは離脱できません」

『ならば、私が殿を努める、沙霧たちは早く離脱を！』

「！？」

沙霧大尉は驚愕をした。

今、この状況で殿を務めたら間違いなく、死ぬ可能性が高すぎる

「彩峰中将！危険すぎます、殿は私が、その間に離脱を！！」

『ならん！』

「ですが！自分は光州の時ように、只黙って見ているわけには行きません！！」

『人は国のためにできることをなすべきである、そして国は人のためにできることを成すべきである！！そして君には、この国の未来を守ってほしい。』

彩峰中將が常に己の信条として重く語ってきた言葉だった。

沙霧大尉は自分が不甲斐無いことを噛み締め、静かに口を開いた

「…彩峰中將閣下、これより…我が隊は撤退します、ご武運を祈ります…」

『沙霧くん、慧のことは頼んだ…』

「…わかりました」

沙霧の部隊は、彩峰中將たちに敬礼をして暴風と大雨の吹きつけるなかを撤退した

上陸から一週間で西日本を制圧したBETA群に対し、米国は日本帝国に新型兵器（G弾）の使用を提案されたが日本帝国は想定される民間人の被害が甚大なものであると考え日本帝国は新型兵器（G弾）の使用を米国に拒否をした

そして、京都前面に防衛線を構築され一ヶ月近くに渡る激戦が繰り広げられるがBETAが京都制圧。

その後、佐渡島にBETAが上陸し、ハイブの建設が開始されて帝国軍は関東・東北地方周囲に絶対防衛線を敷いて絶望的な戦いを続けていたがアメリカは同盟国間の指揮権の問題を理由に日米安保条約を一方的に破棄され、在日米軍を即時撤退させてしまった。

第七話（前書き）

タイトル治しました
駄文、行きます

第七話

第七話

アスカ SIDE

― 仙台基地 ―

白陵基地に着任してからBETAの侵攻から約2ヶ月は基地に缶詰状態でいた

BETAが上陸したときヴァーチェで西日本に行こうとしたが香月博士に『アスカ、すべてを台無しにするつもり?』と言われ、思いとどまった

さらにBETAの防衛線は在日米軍が撤退してしまい、あまりに急な戦力の引き抜きで日本も対応出来なく、防衛線は崩れて白陵基地も危なく第四計画は仙台基地に移設された

秘密ドックにゆっくりと一隻の艦が入る、上は青色で下が白色のクジラを連想させる艦だった

「ドック、カクニン! ドック、カクニン!」

「赤八口、長旅ご苦労さま」

トレミーとドックの情報を見ながら司令部に通信を繋げる

「HQ、こちらトレミー、まもなくドックに着艦します」

『こ、こちらHQ、ドックに着艦を確認しました、艦体を固定します』

HQは、トレミーを見て焦りながら応答してトレミーが静かにアームに固定される

トレミーから出てみると周囲が興味津々とトレミーに集まってくるなに？この視線、俺、何もやってないよ

「…あら、以外に早かったのね」

声が出た方に向けると香月博士と一緒に一人の女性が居た、肩の階級を見ると軍曹で印象は凜としていて年上だ

「いやあ、何事もなく潜行してきましたから」

俺は白陵基地からトレミーに向かい、仙台まで太平洋を潜行してきた苦笑いしながら片手を後頭部に当てていると…

「副指令、この人は一体？」

「まりも、こいつはさっき話した開発者なのよ」

「あの水素プラズマジェットの開発した人ですか…？」

「そうですけど…」

香月博士が俺に向かって指を差して、周囲にいる人が驚愕しながら

俺を見てくる

「ちなみに前に見せたデータの衛士はこいつ（アスカ）だからね」

人に向かって指を差すな！！って、データ？

「シミュレーターで激震、一機でBETA200体も相手にした衛士ですか！？」

まりもと言われる人が香月博士と俺を交互に見ている

いつの間にシミュレーターのデータが保存させられていたとは…

「そうよ、ちなみにこいつ（アスカ）の階級は『少佐』だからね」

「……」

周囲が静まり返り、一斉に視線が突き刺さる

左右を見ても全員、目が点になっている

「……ええええ……！！」

ドック内に驚愕した人の声が響き渡り、思わず両手で耳を塞ぐ

「し、失礼しました、少佐殿！先ほどのご無礼、お許してください！」

「いえ、大丈夫ですよ」

いきなり、謝罪されても困るけどな……

香月博士はためいきをつきながらこちらを見ている

「…アスカ、挨拶がまだだったよね」

「そうですね…桜咲 アスカです、よろしくお願いします」

「ハ、神宮寺 まりも軍曹です、こちらこそよろしくお願いします、少佐殿」

「あ、まりもさん、少佐は肩書きだけなんで呼び捨てで構いませんよ、年下が上官だときついと思うんで…」

「ま、まりもさん！？ですが…」

まりもさんが困惑をして、香月博士が呆れながら言った

「まりも、あんたね…こいつ（アスカ）はあなたより、年下なのよ、呼び捨てにしてもいいじゃない」

「夕……副指令、しかし…」

「まりも！副指令命令でこいつ（アスカ）を階級なしで呼び捨てにすること」

「……はあ、分かりました…」

「アスカ、後で司令室に来なさい」

はあゝHARDだな、白陵基地からトレミーを仙台まで潜行させてから休みなしとは

アスカ SIDE END

仙台基地 SIDE

モニターに映し出されるものは、日本地図にBETAの侵攻を表したデータだった

パウル・ラダピノッドはモニターを眺めながら静かに言う

「―厄介なことになったな…」

「まったくです、このまま侵攻されれば関東はおろか帝都までが蹂躪されていたでしょう」

夕呼は冷静に答える

BETAは東海から西関東を制圧しつつ前進を続けていたが帝都直前で謎の転進して伊豆半島に南下してBETAの分隊が横浜を制圧してハイヴの建設が開始された

「失礼します」

指令室に黒い国連の軍服を身に纏いアスカが入ってきた、ラダピノッドと夕呼の目の前に立ち、敬礼をする

「本日より、仙台基地に着任しました、桜咲 アスカ少佐です」

「私は、仙台基地を預かる、パウル・ラダピノッド准将であるッ
！！少佐には次世代型戦術機開発及び試験衛士テストパイロットを行ってもらおう。」

「は、よろしくお願ひします（若。さん！？）」

ラダピノッドとの挨拶が終わりアスカは夕呼に顔を向ける

「香月博士、『あの件』どうなりました？」

「Eセンサーは一樣、国連、帝国に配備させておいたわ、Eカーボ
ンについては、全てA―01に回しておいたわよ」

「ありがとうございます」

「じゃ、アスカ、始めるわよ」

「もう、始めるんですか？着いたばかりなのに…」

「グダグダ、言っていないでさっさと始める」

- 野外演習場 -

激震が跳躍ユニットを吹かせ砂埃を上げながら演習場の中を突き進
んでいく

誰もが演習場を見ていた、その激震は兵装担架システムが搭載され
てなく腰に搭載されている跳躍ユニットが明らかに大きく、武装は
ライフル一丁と短刀二本だった

激震が所定の位置に着いたら司令部に通信が入る

『HQ、こちら試作機、所定の位置に着きました』

「HQ、只今より新装備の試験を開始してください」

『了解』

激震から500メートル先にターゲットドローン（標的機）が25機、飛行している

激震がターゲットドローンに向かってライフルを構えながら上昇をする

ライフルの銃口にプラズマが発生して一瞬でターゲットドローンがペイント塗れになる

「……!?」「……」

まりもたちは、驚いていた、ライフルから眼にも止まらない速さでペイント弾が発射されターゲットドローンがペイント塗れになっていた

「……副指令、あのライフルは、一体？」

「まりも、あれは電磁投射砲よ」

夕呼はあたりまえように自慢げに答える

「電磁投射砲、いつの間に完成させていたの!？」

「あれは、試作よ、まだ完成していないわ」

大型モニターを見ると激震はヒット&アウェイの戦術で次々とターゲットドローンをペイント塗れにする

アスカは、激震を操縦しながら考えていた

- 遅い、遅すぎる -

いくら威力が高くても物量に言わせるBETAの戦いのときに連射が出来ないと致命傷になりやすい、せめてオーバーフラッグのリニアライフルのデータがあればいいのと思いつつ、ターゲットドローン全てをペイント塗れにする

アスカは、機体のステータスを見ると何処も以上は問題なし、水素プラズマジェットの燃料は予想以上に使っていなかった

『CPへ、こちらアスカ、全ターゲットドローン、撃破』

「CP、了解しました、次の試験に移って下さい」

『了解、次の試験に移行する』

激震は次の場所に移動すると大小様々なコンクリートの塊が堂々と置いてある、激震はライフルを捨て短刀を構えてコンクリートに斜めに斬っているとバターに火で温めたナイフで綺麗に切るようにコンクリートが滑り倒れた

激震の両手に短刀を構えて空に掲げて、機体を回転させながらコンクリートを次々と切り刻む、短刀に切られた複数のコンクリートは一瞬で無残な姿に変えられていく

短刀をコンクリートに向かって投げる、コンクリートを貫通して後ろに置いてあるコンクリートに突き刺さる

『CPへ、高周波短刀、試験終了、高周波長刀の試験に移行する』

「CP、了解しました」

支援輸送車両の側面が展開され、一本の長刀が姿を現した、激震は両手で構えてコンクリートに縦切り、横になぎ払い、斬り上げていく

誰もがモニターに映る激震に驚いていた、なぜあんなに跳躍ユニットを使っても推進剤が切れないのか？なぜコンクリートをいともたやすく斬れるのか？あの激震、硬直時間がなくないか？

伊隅みちるは激震の性能ではなくアスカの操縦技術について考えていた

電磁投射砲の試験のときに空中で高速移動しながら正確にドローンを当てていた、ターゲットの位置、移動の速度、現在の体勢、ロックオンのタイムラグなどを一瞬で理解し最適な射撃体勢にしてやっていたのだ

夕呼は楽しみに笑う

「伊隅、今試験している装備をあなたの部隊に配備とこの試験のデータを閲覧させておくわ」

「は、ありがとうございます」

「伊隅、相変わらず私に敬礼は、やらなくていいわよ」

夕呼が苦笑いしているとまりもが真剣な面持ちで夕呼に聞いてきた

「副指令、桜咲さんは一体何者ですか？開発が出来て、衛士の技術が高く、こんなに優秀すぎてどこかで有名だったとか聞いたことが

ありません」

「まりも、あいつ（アスカ）は『研究』のために配属されたのよ……
こういえば分かるかしら」

「……はい」

まりもは考えていた『研究』それが計画のこと、夕呼が絶対教えないこと、そして自分がそれ以上知ってはいけないことを……

「ヘクシュン！」

アスカはくしゃみをしながらコンクリートを倒していた、長刀を見ると刃こぼれがしていない
通信をOFFにして長刀を構える

「ハ口、あれをやるぞ」

「リヨウカイ！リヨウカイ！」

アスカは大きく目を開き、あるセリフを言う

「我が名は、アスカ！アスカ・サクラザキ！我こそは悪を断つ剣なり！！」

深呼吸をさせて操縦桿を強く握り、コンクリートに連続で斜めに斬りつけて最後に長刀を振り下ろす
振り下ろした長刀が地面に当たり衝撃が来る、すかさず衝撃の反動を利用して跳躍を始める

「とどけ、雲耀の彼方まで!!」

跳躍ユニットを最大出力にして空にむかって上昇を始める、ある程度の高度に達したら長刀を大上段に構え、跳躍ユニットを上に向けて激震がコンクリートに向かって加速する

「チエストオオオオー!!!」

落下の速度を加えて一気に振り下ろす

コンクリートは竹のように綺麗に真直ぐ割れた、激震はコンクリートから長刀を抜きながらゆっくりと立ち上がる

「我に断てぬもの…ニャー…!!?」

アスカが言った瞬間、綺麗にボタンと後ろに激震が倒れた

ステータスをみると脚部がエラーと表示された

なぜ、倒れたか?と言うと、武。装攻のように人工筋肉を搭載されてなく、搭乗者の動きをトレースするダイレクト・モーション・リンクを使って全体をしなやかに落下の衝撃を緩和するみたいに出てなく、脚部に過負荷がかかり耐え切れなくなって倒れたのだ

「……」

司令部全員は呆然としていた

伊隅はモニターを見ながら静かに口を開いた

「…副指令」

「…分かっているわ、最後見たのデータだけは消しておくわね…」

「ありがとうございます…」

伊隅は安堵しながらため息を吐いていた……………

激震の試験が終わり、試験のデータを見ながら夕呼は八口を使い政府に通信を繋げた

「もしもし、香月です。榊総理、横浜ハイヴの攻略を提案します」

『…香月博士、どういうことかね？』

五十代の特徴的な野太い声が八口から聞こえてくる

「戦術機による横浜ハイヴの制圧とアメリカよりG元素の確保こそ、オルタネイティブ計画を大きく進展させ、日本の劣勢を覆すことが必要でしょう」

『だが、今の疲弊した戦力では、BETAに太刀打ちできないぞ』

「それは、もちろん分かっていますが横浜ハイヴを早めに叩いてお

かないと佐渡の二の舞になりますわ…」

「……………何か、対策があるのかね？」

夕呼は、待っていましたと言わんばかりに笑みを浮かべていた

「さきほど新装備の試験が終わりましたわ」

「新装備の試験？」

「電磁投射砲及び高周波装置の試験です、試験が終わり、あとは実用化するだけですわ」

「電磁投射砲と高周波装置をいつの間に開発していたとは…分かった、議会に働きかけよう」

第七話（後書き）

ボスの技使ってしまった…

ちよつと、更新が遅くなります

第八話（前書き）

明星作戦の前に。。。が現れた！！

どうする？

たたかう どうぐ

ぼうぎょ にげる

第八話

第八話

アスカ S I D E

気づくと夜の暗い路地を歩いていた
建物を見るとレンガやコンクリート作り建物が並んでいる
この世界の日本にいないことは、たしかだ

「どこだよ、此処は？」

とにかく、広い道で誰かに此処は何処だか聞いてみようとでたらめに曲がってみたら…

「行き止まりか…」

来た道に戻ろうとしたら何かが覆いかぶさってきた

「な、なんだ？」

驚きながら足掻いてみると軽くブルーシートが覆いかぶさったような感覚だった

覆いかぶさってきたものを見てみると黒く、網目がある

「網？なんでこんな物があるんだ！？」

遠方から爆音が聞こえてきた、爆音は確実に接近してくる

目の前に一台のバイクが街中をブレーキ音が響き渡る、轟くエンジン音と暗い道を照らしだすヘッドライト、バイクに乗っていた一人の男がいきなり背中に背負っていたエレキ・ギターを弾き始めた

「掛かったな！ESP能力者、略してE者、ここであつたが…はじめましてである！」

「はあ！？」

自分のフリーズ寸前の思考を何とか止めて愉悦の表情を浮かべている白衣の男の目を見ると狂気の色が宿っている

・あの男はやばい・

と、自分の脳量子波が警告してくる、しかし、何処かで見たような……？

「……どちらさんで？」

「なななななッ、なんと！一億年に一度、生まれるかどうかという奇跡の寵児、大天才科学者ドクター・。エストを知らないででも？」

「……………（ドクター・ウ。スト）！？」

大体は、記憶が繋がった、間違いない。あれは。チガイだった、狂った笑い声とであるという語尾、あれは絶対、キ。ガイだ！

「なんたる無知！無知とは罪！悲しみと絶望に彩られた君の人生を喻えるならば、この手のひらに舞い降りた儚い淡雪のようなもの。」

ああ、雪がすべてを白く埋めつくす。そう、ボクの悲しみもなにもかも。ゴゴゴゴ……。なに？なにが起こったの？な、雪崩れ！？ギヤー！」

あのキチ。イが、独演会始めてこの網からの脱出を試みるがどうにもこうにも網が捕れない、なにか切れるものがないか、ポケットの中を探ると……。ライターがあつた

すかさず、ライターを点けてみるが火花が出るが火が点かない、何度もやっても火花が出るだけ

「火が点かないライターだな！！」

あのキチガ。は、自分の演説が終わるとバイクに備えつけられているギターケースを抱え上げると、それを肩に担いだ。

「なんだかいろんなことが走馬燈のように巡ってくるのであるが——ともあれE者よ、これにてさらば。貴様の死を乗り越えて、我輩はまた少し大人になった！さらば、少年時代！一夏だけの淡い恋心！アイム・ロッケンロール！」

。。。。が叫ぶと、ギターケースの先端に丸い穴が空いたなに、この展開？

「！？」

「レッツ・プレイ！」

と同時に、その穴から発射されるロケット弾、おもわず顔を守るように両手を構えて目を瞑る

「……………」

一向にロケット弾が爆発しない、何か……。の近くで重たい金属が落ちた音がした
目を開けてみると……。が慌ててふためいて近くにミサイルが落ちていた

「は、はいいいいいいいつ!?!」

ありえないと言いたげな……。の顔、次の瞬間、ミサイルが光りだして周りが見えなくなり爆音と爆風と爆炎が辺りに撒き散らしていく

「ノオオオオオオオオオオオ!」

「なんじゃ、そりゃあああああああ!」

俺と人格崩壊式科学者の断末魔の叫び声が夜空に響き渡った

人格崩壊式科学者ファンの皆様すいません

「ハア、ハア、夢か…」

目を覚ますと仙台基地の個室だった、体中汗だらけで服が体に纏わりつく、時間を見ると4時だった

今一度、さっきの夢を考えてみよう

なぜ、夢に恐怖と混乱をお茶の間に提供する人格崩壊式科学者がいたんだ？

しかも、ESP能力者を探していた、さらに俺はESP能力者ではなく脳量子波が使えるだけ

今度、夢に出てきたらぶん殴っておこう…

シャワーで汗を流してPXで朝食を食べていると基地内アナウンスで香月博士に呼ばれた。

「帝都へ！？」

「そうよ、帝都からお呼びがかかったのよ、あなたがね」

香月博士がため息をつき呆れながら言ってきた

帝国軍が多摩川あたりで24時間態勢の間引き作戦している時になぜ、帝都から呼び出しがかかったんだ？

「あんだね」『光州作戦』の時に名前をあかしたよね」

光州作戦…破壊したステーションと一緒に大気圏突入の際、宇宙ステーションを破壊してトレミーに帰還しようとした矢先にステーションの破片があたり、光州に落下して年越しそばを食べられなくて

年を越して軍の通信を傍受して援護した時だったな。その後、軍から何事も無く、立ち去ろうとしたら……

「こちら、帝国陸軍所属、彩峰萩閣中将だ。支援を感謝する！貴官の所属を答えよ」

「アスカ……桜咲 飛鳥です！では、失礼します！」

あゝ！？

ヤツチャツタ、テへ……俺のバカアアアアアアアアアア！
なに、名前あかしているんだよ！

そのまま、守秘義務を貫き通せばよかったんだよ！
配管工事兄弟のBダッシュ中に穴を飛び越えようとしたら穴にジャストミートか！

最後の旗でも高台からジャンプして距離感覚が掴めないで100しかとれないことか！

「ハロ、あのバカ、止めなさい」

「リョウカイ！リョウカイ！Dモード、起動」

え？今、ハロ何か言わなかったか？

「イツテナイヨ！イツテナイヨ！」

お前も心を読むなー！つか、ハロそれはなに？眩しく発光しているんですけど…

「ハロ、お前、サイコぶれええええ」

「Dモード、終了!!」

ハロがアレを搭載していたとは恐るべし! って、ハロ、お前は一角獣か!

「で、思い出したかしら?」

あの…背中から禍々しいオーラをだすの止めてもらいませんか? さっきから汗が滝のように流れているんですけど…

「はい、すべて思い出しました…」

「ったく、厄介なことをしてくれたわね…」

「すいません…」

「ま、いいわ。帝都にいく時、国連の制服で行くのはやめなさい、あの国のせいで国連は恨まれているわよ」

あの国「アメリカが日本から撤退をしまい、日本の反米感情が高まってしまった

アメリカが実権を握っていると言われる国連にも、反米感情の恨みがきて日本との関係がかなり悪すぎだ

「それじゃ、別な服で行きます」

「分かったわ、将軍に無礼がないようにね」

「しょ、將軍！？俺を呼び出したのが日本帝国国務全権代行征威大將軍殿下！？」

「うるさいわね…その將軍よ」

なぜ国民から崇められている日本帝国国務全権代行征威大將軍殿下が国連の端切れにいる俺を呼び出したんだ？

—こういうのは初めてかね？桜咲 飛鳥君 -

「！？」

後ろから声が聞こえて振り向くとトレンチコートを来た男性がいた
脳量子波に感知されずにいつの間に居たんだ！？

「おやおや、そんなに警戒しなくても大丈夫だよ、桜咲 飛鳥君」

知らない人に名前を二回も呼ばれると警戒するに決まっているじゃないか！

「香月博士…この人は、一体？」

「帝都情報省の人よ、礼儀がなく、勝手に人の部屋に入る変質者よ」

「これは耳が痛い、博士に変質者呼ばれとは…」

勝手に人の部屋に入るって、プライバシー侵害だろ

「つか、この世界に前の世界の法律が存在するのだろうか？
社とか労働基準法に引っかけりそうけど……」

「で？あんたがお迎えの人？」

「ええ、そうですよ、私は帝都情報省外務二課の鎧衣だ」

「よろしく、お願いしますね」

この人、ある意味、危険だ

アスカ S I D E E N D

アスカが着替えるため自分の部屋に戻って行ったら
夕呼が鎧衣に目を向ける、鎧衣が動くことは何かあるということだ

「鎧衣、あんたは迎えに着ただけじゃないよね？」

「今日はそれだけです。そういえば明日の国連総会で、かの国が
例の作戦を共同したいと国連に話かけていますよ」

「共同？介入の間違いじゃないの？」

「五番目に必要なG元素を確保するためにあの国がやる気になって
いますからね」

「あんたが、あの国を煽ったでしょう？やりすぎると火傷するわよ」

「いえ、ちょっとお話ただけですよ。おや、時間ですか、美しい博士との会話は名残惜しいですが私も仕事を成さねばなりませんので失礼」

鎧衣がドアの前に立ち、夕呼に振り向く

「ところで」

「なによ？」

「博士は、パンドラの箱を手に入れたのでしょうか？」

「災いとか希望ではなわないわ、ただ一つの可能性よ……」

アスカ S I D E

礼服など持っていないくCBの青い制服を着て仙台基地の門に行くと鎧衣さんがいた

「おまたせしました、行きましょうか？」

「ほう、変わった格好ですなあ」

「ちゃんとした服がなかったもので……」

まじまじと見られるのは困るんですけど…

「あのそろそろ、いだだだだだだだ!!」

「ふむ、実際に触つてみると体温があるな」

急に人の頬を引っ張るんだ!?!
手をどけて距離をとる

「生きているからあたりまえじゃないですか!」

「おや、時間がないから行こうか」

なにこの人?マイペース過ぎるんですけど?
香月博士が鎧衣さんを変質者呼ばれてこれのこと?

第八話（後書き）

まだ、明星作戦入りません

第九話（前書き）

あえて言わせて貰う、この物語は駄文と文才0とキャラ口調変である！

と言った感じの小説です

第九話

第九話

アスカ SIDE

―帝都城―

外は深い堀に高い城壁、周りは人が手を加えた自然、敷地はよくテレビで言われる東京ドームの数以上、城の中は豪華な装飾品や数億もくだらなさそうな美術品の数々。

俺という存在が場違いか？帝都城に入ったら鎧衣さんが急にいなくなり案内人に案内されある一室入る、部屋の中には日本帝国国務全権代行征威大將軍 煌武院悠陽殿下、斯衛軍 紅蓮醒三郎大将、月詠真那中尉が目の前にいる。

あれが日本帝国国務全権代行征威大將軍、あの若さで日本の全てを背負っているなんて…

さつきから疑いの目をむけたり興味津々と見られて脈が上がるわ、歩きたび油を差していないロボットののような音が全身から聞こえてくる

「は、始めまして、わ、私は国連太平洋方面第11軍仙台基地所属、さ、桜咲 アズガア……です」

噛んでしまったー！殿下は笑っているし、斯衛の人はニヤけて

いるし、警戒している

「私は日本帝国国務全権代行征威大將軍 煌武院悠陽です、急な御呼び立てすいません」

「殿下！」

「め、滅相もございません、あなた方ような高貴なの方がわ、わ、わたくしのようなボウフラにも劣るもしくはそれ以下、社会の屑で、ゴミで、塵芥で、むしろ生きててすいませんって遺書書き残さなくていいから首くくって早く地獄に行け、すぐに行け………な人間な

「？」

「「……………」」

殿下以外、みんな呆れている……………事実を言っただよ、本当に！！

「…素直に聞きます、あなたは何者ですか？」

いきなり、核心からですか！？

「過去の戸籍また桜咲という苗字が存在しないで全てデータベースを改竄して国連に入隊して計画に近づいた目的はなんだ！？」

香月博士、ばれていますよ……………

「さらに、水素プラズマジェット、電磁投射砲、高周波装置、E力

「ボンなど現在の技術を凌駕する技術、そして光州作戦中に確認された緑の粒子をだす戦術機」

300年後の技術だからな」

「つか、極秘にA-01に装備するものをどうして知っているの？かなり情報規制が掛かっていたはず…」

「帝都情報省の人よ、礼儀がなく、勝手に人の部屋に入る変質者よ」

帝都情報省…あの人かあああああ！

トレミーは誰も入れないはずだから俺の部屋に入ったのか？

「最後に帝都大学で検査された時、何も出なかった、貴様本当に人間か？」

「……………」

検査の結果は嚴重に管理されているはずだ、斯衛は権限を使って探し出したのか？

「答えられませんか？」

「……………ばれている、隅々までばれている、地球に来た時から今日に至るまでばれている」

全てを見透かすような目で見られるとこっちが困る
覚悟を決めよう、あまり関わりたくなかったがもうこの世界と無関係に要られない

「……………まず、殿下にご無礼を申し上げます、あと堅苦しい敬語で話すのは、苦手なので普通に喋らしてもらいます」

「構いません」

「俺、桜咲 アスカは、この世界には存在していません、別世界にいた人間です」

「別の世界の人間じゃと？」

「はい、正確には、気づいた時にこの世界にいました」

「どういうことだ？」

「原因は不明ですが俺の母艦が異常を起こしこの世界に迷い込んだのです、今は元の世界に帰ることが出来ずこの世界で生きようとしています」

「……………」

「あなたは、この世界で何を為されるつもりですか？」

世界を救うとか、大それたことは出来ないけど、今は……

「己の意思でこの世界と向き合い、生きる為に戦います！」

アスカ SIDE END

帝都 SIDE

アス力は全て話した、この世界を凌駕する技術力、この世界に来てから動向、世界の情勢を知りアス力の力を各国が手出しできないようにするため四番目を協力した、話せば話すほど時間が掛かり、アス力は帝都城に泊まることになり客室に案内され部屋を出て行った

「…とんでもない者が我々の所に来てくれたのう、月詠」

「まったくです、我々の想像を遥かに超えています」

「ですが、真那さん彼の目にうそ偽りがありません」

「殿下はそう見るのですか？ 鎧衣よ、お主はどう見る？」

全員が扉を見ると扉から鎧衣課長が入ってきた

「私は、なかなかの青年だと思いますよ」

鎧衣課長はアス力と分かれた後、隣の部屋からこっそりとアス力の話を聞いていた

「ほう、お主はそう思うか、しかしあの若さで平然と自分の信念を語るとは、なかなかの肝が据わっておる」

「未来を掴むため…」

「殿下？」

「…彼はわたくし達の力になってくれるのでしょうか？」

悠陽は考えていた

自国には二つのハイヴを抱えており、月のハイヴを落としたアスカの力が必要だがアスカの力を日本に取り入れれば各国が黙っていない、アスカがせっかく隠してきたことが全て水の泡となってしまう

「殿下、直接、彼に聞いてみればよいのでは？」

帝国 SIDE END

アスカ SIDE

客間に案内され、部屋の中を見ると豪華なホテル以上にきらびやかで華やかだった

「はははははあ……………」

驚きを通り越して笑うしかなかった、ベッドは天井付き、家具などは装飾品が施し、まわりにある美術品はこれでもかと言つぐらい、部屋に合っていた

「と、とりあえず、ヴェーダに繋げてみるか」

脳量子波を使い、周りに人がいないか確認して持ってきたハ口を使いヴェーダにアクセスしてみる、BETAの上陸から今日に至るまで情報の確認をしていなかった

「明日の国連総会の横浜ハイヴ攻略作戦は可決して、アメリカが作戦に参加する、どうせ、国連での自分たちの立場を守るためとG元素確保に乗り出すためか…」

けど、なにか、引つかかる。

とてつもなく、最悪なことが起こりそうで胸騒ぎがする
できるだけ、手を打っておこう

「ハ口、ヴェーダを使ってアメリカの監視」

「リョウカイ！リョウカイ！」

ふと、思い出す白銀は横浜に住んでいたはず、BETAの侵攻で避難したと思うが念のため、確認してみる

「ハ口、白銀の情報は？」

部屋の中に投影された情報を見ると……

— 白銀 武 行方不明 —

「白銀が行方不明？ハロ、ヴェータを使い、白銀の足取りを調べてくれ」

「リヨウカイ！リヨウカイ！」

ヴェータから送られてきた情報を見るとBETAが西関東制圧してから姿が消えていた。さらに調べてみると西関東制圧された日から白銀武における住まい、経歴、戸籍が始めから無かったように消えていた

何かがおかしい？ヴェータの情報はあるのにこの世界には白銀の情報がない、いくら情報を改ざんできても白銀が住んでいた家とかは改ざんできないはず、監視衛星をハッキングして過去のデータを見てみると白銀が住んでいた家が存在していない

「なにが起きているんだ？この世界」

突然、携帯のメール着信音が鳴り響き、メールを見てみると一部制限解除とコンテナ使用可能が表示された

アスカ SIDE END

アメリカ SIDE

国連総会では横浜ハイヴの攻略の賛否が取られ、可決されたが第五計画推進派の横槍でアメリカ力が作戦に参加することになった

「作戦名はオペレーション・ルシファー、パレオロゴス作戦に次ぐ大規模反攻作戦です」

暗い会議室にプロジェクターの光がスクリーンに当たり、横浜ハイヴの情報が映し出される

部屋の中はエアコンの駆動音が聞こえて大統領は静かに口を開いた

「……………戦術機によるハイヴ攻略作戦は成功するのかね？」

「統合軍の調べによりますと横浜ハイヴがフェイズ2と予測して約4体6の割合で成功すると思われます」

統合軍総司令官は明星作戦までのアスカの技術を入れないで帝国及び国連の軍備増強を計算に入れて導き出した答えだった

「4割だと！？ジャップは、何を考えている？いたずらに戦力を消費するつもりか？」

「BETAが西関東制圧で頭がイカれたか？」

大統領・統合軍総司令官以外は明星作戦のことに騒ぎ出した佐渡ハイヴからのBETAの侵攻でアメリカは撤退して帝国の防衛線は崩れて戦力が疲弊しているときに横浜ハイヴの攻略をするなどバカバカしいと誰もが思っていた

「親米派の話によると帝国の裏で四番目が五番目に牽制するためにハイヴの攻略を進言されたと言っています」

「四番目だと!!?」

「諸君、どうやら魔女は意地でもG元素を確保したいと思っているだろう」

「大統領、作戦中になにか支障をきたせば新型の『あれ』の使用許可を…」

「……………分かった、作戦行動中になにか支障がある場合『あれ』の使用を許可する」

その後、新型兵器を搭載した装甲駆逐艦が打ち上げられた

第十話

第十話

アスカ SIDE

― 帝都城 ―

こんな、豪華すぎるベッドで寝られなく、近くのソファで寝ていた数日間は帝都城ですごしていたが、どうも帝都城という場所は上品で苦手だった

「そろそろ、仙台基地に帰ります」

「もう少し、ゆっくりとしてくれませんか？」

「横浜ハイヴの攻略作戦の準備がありますのであまり長居はできないです」

殿下との話は楽しいがアメリカの動向やコンテナの中にある機体が気になっているし、A―01になにか装備が追加できるかもしれない

「あ、そうそう、これを渡しておきます」

月詠さんにある情報が入ったファイルを渡した、月詠さんがファイルの中身を見ると驚愕をした、月詠さんから紅蓮大将に渡され、驚

いている

「この情報は、一体？」

「各国の裏情報です、おもにアメリカが世界に知られていけない秘密です」

大学にいた時にヴァーチエを守るためにヴェーダを使って各国にハッキングした情報で各国の情報をみたら軍事、政治、賄賂、愛人関係、給料詳細などの細かく載っていて帝国に必要な情報をまとめたファイルだ

一部は知らなくて良かった情報だったかもしれない

「これまで調べ上げるとは、まことに恐るべき技術よ」

「自分が持つてもしょうがない情報なのでこれをあげますね、あと帝国でも怪しい影があるのでご注意を」

「分かった、こちらでも調査をしておこう」

「アスカ、私達に力を貸してくれませんか？」

「すいません殿下、今を取り巻く世界の状況とまだ不完全すぎる自分の力では貸すことも間もならないのです。」

「……そうですか」

そう落ち込まないでこっちまで落ち込みますから…

「でも、何かある時には八口を渡しますので使ってください微力な

がら力になります、」

殿下にハ口を渡すと不思議そうにハ口を見ている

「デンカ、ヨロシク！デンカ、ヨロシク！」

「こ、これは、一体？」

「通信、機体の制御、データの閲覧まで何でも出来る俺の相棒です」

「…そなたに心よりの感謝を…」

うん、ハ口を抱きしめた殿下は、いい絵になる、あれ？月詠さんハ口を物ほしそうな表情で見ている

「あゝの、月詠さん、ハ口一台あげますか？」

「い、いやあ、そんなことは、ありません！」

「月詠よ、顔に出ているぞ、貰っておけ」

「……はい」

と言うわけで月詠さんにハ口をあげて仙台基地へ帰ることになった
仙台基地に戻ると香月博士に「ただの呼び出しに何日掛かっている
のかしら？」と殺意が込められ、3時間ぐらい正座をさせられて暴力
言語という説教が執務室に響き渡った（泣）

数日後

―仙台基地　ブリーフィングルーム―

A―01と整備兵がブリーフィングルームに入りきれないほど集まっていた

「これより、不知火の新装備を説明する。桜咲少佐、説明を」

「はい、今回の新装備は前回の試験の時に使われた装備の改良型を配備します」

伊隅大尉が挙手をしてきた

「伊隅大尉、どうぞ」

「は、前回の試験で電磁投射砲は構造上の連射が出来ないことに問題になっていましたが改良型はどうなっていますか？」

「改良型は中央部が単発式で左右に連射式を取り入れ、砲身の上部に冷却・防磁用のジェルを使用し、実戦向きにできるようにしました、そして短刀に新たなプラズマソードを使用してきて機体の燃料に注意してください」

今回の解除されたのはファーストシーズンのユニオンの全情報だ
オーバーフラッグの技術を使い、A―01の不知火に出来るだけ転用させた

「装甲は新しく開発されたEカーボンに変えて新型の跳躍ユニットは出力が大きすぎて衛士に掛かるGが大きいので制限をかけましたので勝手に変えないでくださいね。あとはA―01が使っているOSなんですけど…」

「なにか、問題でもありましたか？」

伊隅大尉が不思議そうに見てきた

「問題はないんですけど、逆にOSがA―01の操縦に追いつけなく一度A―01のデータを集めて新しくOSを作るので当分の間、不知火は改修するので使えませんので気をつけてください」

「了解しました」

「えーと、ほかに質問がある方は？」

という、具合に不知火の説明会が終わり、その後帝国軍の人たちと話し合いになった

なんでも、香月博士が横浜ハイヴ攻略を進言したときに電磁投射砲と高周波ブレードのことを話したそうで香月博士は前の試験に使った激震の装備（フラッグの技術の転用した装備）を量産して帝国軍に納入する話だった

話し合いの軍人さんたちは、酷くやつれていた
香月博士との交渉の際、こつてりと絞られたのであろう、ご愁傷様です

ベッドに仰向けになりながら明星作戦について考える

Eセンサーは作戦に参加するアメリカ以外の国に配備されている
帝国と仙台基地にフラッグの技術を転用した装備は西日本の生産工場が失っているため、中隊長まで装備することになった

A-01はオーバーフラッグを転用しているため、まあ大丈夫だろ
問題はあの国と俺か……

次の日、香月博士の所にいた

「…明星作戦前に別行動？」

「A-01の不知火の改修が終わったら、トレミーで東京湾近くに向かい、ガンダムの調整を行います」

「で、本音は？」

「金にうるさく、傲慢で、プライドが高すぎて回りの国から嫌味が出るほどの国がかってに火遊びする可能性があるので監視と悪戯の準備をします」

「火遊びね……」

アメリカが妙に慌ただしく動いている、明星作戦中にG弾を使う可能性が出てきた

どうにかして、止めなければならない

トレミーを宇宙に上げてG弾を輸送している装甲駆逐艦をガンダムで撃沈……いやいや、いろんな意味でまずい、こちらの力を見せるわけにはいかない

「ここは、穩便に済みますか？」

「…で、明星作戦は参加するの？」

「新しいガンダムで明星作戦には参加します」

「あのガンダム？資料で見たけど、武装がアレで大丈夫なの？」

「あのガンダムはヴァーチェと違う戦い方ですんで大丈夫ですよ」

コンテナを開けたらあのガンダムが入っていたとは、驚きだったまさか、こんな状況でこいつが使えるなんて、ご都合主義だな

「…分かったわ、これ渡しておくわね」

香月博士から四人の情報が書かれた紙が渡された

「えーと、A―01に入隊する人ですねって、なんで俺に？」

「あんだねえ…この後、不知火の改修してそれが終わったら横浜に直行するとA―01に新しく配属する人と顔を会わせられないでしよう」

まあ、たしかにいきなり知らない人が増えていたら困るよな

「速瀬 水月、涼宮 遥の二人は総合戦闘技術演習で事故に遭い入院中…事故！？この人たちって大丈夫なんですか？」

「速瀬は、明星作戦後にA―01に配属。涼宮は、けがで衛士にはなれないから本人の希望でA―01の戦域管制を担当することにな

「たわ」

……けがで明星作戦後に任官されるのか、G弾が使われそうな作戦に巻き込まれずに良かったと言えいいのか？

次の人は、鳴海 考之（ヘタレの中のヘタレ）……………

……………えっ！？

「香月博士、この名前の欄に鳴海 考之（ヘタレの中のヘタレ）のヘタレの中のヘタレってなんですか？」

「そのヘタレの中のヘタレは、ヘタレ・オブ・ヘタレよ」

ヘタレ・オブ・ヘタレって、そのままじゃないか！名前の欄に書かれているのは手書きだし、この人に何があるだろう？

個人の情報を見るのは気を引くがヴェーダで調べてみるか…

その後、格納庫に泊まりこみながら不知火の改修に勤しんでいた

「少佐、不知火と跳躍ユニットの接続部分なんですけど」

「その部分は、こっちの配線をここに繋げないと不具合が起きるから注意してくださいね」

「分かりました、ここの部分ですね」

「そう、ここの部分だから」

「ところで、少佐。この新装備の名前はなんですか？」

「名前は、まだ決まっていなよ」

「……」

いきなり、格納庫が静かになった……

「まずかったかな……？」

「そりゃ、まずいでしょ」「まだ、決まっていないますか？」「名前、決めたほうがいいですよ」「名前は、大事です」「こいつらの名前は無いんですか？」

整備兵が集まってくる、一瞬で囲むの怖いからちよつと離れて

「ああああ、一度に喋るな！名前は今考える！！」

はあゝ名前はとうしよう？

ユニオンの技術を転移したから頭文字を合わせるか？

「不知火の新装備の名前は、不知火 オーバーフラッグ OFタイプ」

「OFタイプ？少佐、名前の由来は？」

「オーバーフラッグと言う戦術機を元になっているからOFタイプ、
ちなみに試験で使っていた激震は、フラッグを元になっているからF
タイプ」

「少佐、オーバーフラッグやフラッグと言う戦術機は聞いたことが
ないです」

そりゃ、この世界にない機体だけど、ヴェーダに設計図があるから作ってみるかな？

「公にされていない試作機だから知らないのは、当然」

「なるほど」「」

「とりあえず、不知火の改修は、ちょうどいいところかな？」

「そうですね、明星作戦前には全機体、出撃可能ですね。」

「それじゃあ、そろそろ行くから後ヨロシク！」

「は、ご武運を祈ります！」

格納庫にいる整備兵たちが敬礼をしてきた、思わず、敬礼をして格納庫を出て、トレミーに向かう

「ハロ、待たせたな。」

トレミーのブリッジに入ると赤ハロと白ハロが作業をしていた、トレミーの状況をモニターで見ていると何処も異常なし、いつでも動ける、操縦席に座ると不知火の改修作業の疲れが消えていた、通信を司令室に繋ぐ

「HQ、こちらトレミー、出港の許可をお願いします」

『こちらHQ、出港の許可が下りました、ドッグ内の放水後、固定用アームを解除します』

「了解しました」

ドッグ内に水が満たされ、アームが解除される
少し、揺れる感覚がきた
ドッグと海を繋ぐゲートが開放され、トレミーをゆっくりと後退させて潜水を開始する

「トレミーは潜水後、最大船速。目標、横浜ハイヴ」

「「リヨウカイ！リヨウカイ！」」

アスカ S I D E E N D

??? S I D E

.....世界.....混沌.....静寂.....不可.....

.....資源.....災害.....監視.....

.....白銀.....障害.....消去.....

.....異物.....介入.....不明.....警戒.....

第十話（後書き）

装備設定

OFタイプとFタイプ見ためは、変わりませんが戦術機にリニアライフルなどを搭載した感じですが、名前にセンスが無いのはご了承下さい

次は明星作戦に入ります

第十一話（前書き）

明星作戦、スタートです

第十一話

第十一話

1999年8月5日

東京湾には帝国海軍連合艦隊と国連太平洋艦隊が展開していた艦隊はある場所を睨むように囲む

―横浜 ハイヴ―

去年の12月に建設が確認された、忌々しいBETAの巣帝国は、西日本制圧、佐渡ハイヴ建設、西関東制圧などされ、敗戦の連続だった

もう帝国には後が無いこの明星作戦に掛けるしかなかった

「艦長、作戦の時間になりました」

「では、本艦はこれより、作戦を開始する、各員戦闘準備！」

艦内にアラームが鳴り響く、艦内は慌ただしく人が行き交う艦に装備させられている主砲がBETAに向けられた

「一番から三番、対レーザー弾頭弾、装填完了」

全て整えた、あとはこの艦を指揮する人の声だけだ

網膜投影システムから送られる戦域マップを見たらBETAの数は中隊規模だ

「ホワイトファング1より、各機！隊形を傘型から鎚型へ！」

V字型に展開されていた部隊がハンマーヘッドの形に移行した
部隊の隊形が終わると一部は突撃砲を構え、ほかは肩に装備している弾道ミサイルを展開する

「…攻撃開始！！」

『ホワイトファング12、フォックス1』

弾道ミサイルが要撃級に当たり爆発を起こす、それに応じるように展開されていた部隊が突撃砲を使いBETAの駆逐が始まったある程度数を減らしたら山吹色の瑞鶴がある物を試そうとしていた

「ホワイトファング各機へ！例の新兵器を使うぞ、注意しろ！！」

『『『了解』』』

網膜投影システムから送られる情報を見ながら山吹色の瑞鶴に搭載されている電磁投射砲を構える

機体に問題はない、あとはトリガーを引くだけ、一度、深呼吸をして操縦桿を握りなおす

電磁投射砲を撃つとみると、目にも止まらない速さで突撃級の体に穴を開けていく

「こ、これほどの威力！？」

『これが新兵器の性能ですか…』

隊のみんなが驚愕していた

明星作戦が決まった後日に急遽、中隊隊長までの戦術機が改修させられた、始めは不安を感じたが乗ってみると機体の汎用性が高く、なんもわだかまりがない

周りのBETAを倒して周囲を警戒して補給していると特殊回線が繋がってきた

『中尉、新装備の調子は、どうですか？』

「調子はいいがおかしくないか？日本の技術力では、一度に幾つもの新装備が出来るはずが無い、まして外国がこの新装備を提供した情報がない」

『中尉、ある噂を耳にしたのですがこれらの新装備は国連から提供されたもので開発者はすでに死んでいるようで…』

「死んでいる？これらの新装備を開発した人が？」

『どうやら開発者は横浜出身でBETAが西関東を侵攻してきた時に偶然にもその場所にいたらしく、BETAに殺される間際に国連に設計図のデータを送ったらしいのです』

この噂は各国から新装備の開発者が分からないようにアス力たちが流した偽りの噂だ、ちなみにこれらを開発したアス力を知る人たちは、帝都城の煌武院悠陽、紅蓮大将、月詠中尉、鎧衣課長とごく僅かな仙台基地の四番目関係者たちだけで厳重に情報統制されている

「…横浜出身なら、帝国に設計図のデータを送ればいいんじゃない

か？」

『それがですね、送られたデータに遺言があったのです』

「遺言？」

『私はもう殺されるだろう、最後の頼みだ、このデータをもらった人に願おう、この設計図は人類がBETAと戦うための力だ、むやみに人類同士の戦いや利益に使うものではないことを切に願うと言った遺言だったんです』

「自分の死ぬことより、世界のため願うなんて……」

『すごい、話ですよね』

これも嘘である、だがこの話を聞いていた帝国議会では一部の人が号泣したとか、しなかったり…

アスカは帝国議会のことを呆れていた、お偉いさん方がこんな話で泣くなんてよほど娯楽などに飢えていると思っていた

そのころ、国連軍は相模湾から上陸してBETAと交戦中であった二機の不知火が戦場を駆け抜ける、右肩にUNの文字が書かれた国連の機体だ

改良型の電磁投射砲をBETAに向かって射撃をする、BETAが蜂の巣にされ体液が飛び散る、もう一機の不知火は前腕外部分に納められている短刀を展開させ切り裂く

「すげえ、BETAを意図も簡単に倒すなんて前に使っていた訓練機よりも威力が桁違いだ」

『考之、こつちもすごいぞ、短刀もBETAを紙切れのように斬れる』

これなら取り返せる！俺たちの町が……と思った瞬間、伊隅隊長から通信が入った

『バカもの、先行しすぎだ！隊形を崩すな！』

『「すいません！」』

『自分の住んでいた町を取り戻したい気持ちは分かるが今やるべきことに集中しろ』

「了解！ところで伊隅隊長この不知火OFタイプは高性能すぎませんか？」

ヘタレのこと考之はA-01に入隊して不知火OFタイプに乗せられた時、機体の能力に振り回されていたが二週間ほどでなんとか乗りこなしてみせた

この不知火OFタイプは自分が知っている戦術機の中で最強クラスに入るだろう

『鳴海少尉、この不知火OFタイプはブリーフィングで話したとおり制限が掛かっている、今の状況で不知火みたら高性能とは呼べない』

「これの上にまだあるのかよ」

制限……このOFタイプにだけ掛かっているもの、機体のマニュアル表では強化装備を着けてもかなりのGが掛かると言われている、OFタイプの開発者は危険だから制限を掛けたと言っていた

「伊隅隊長、これを開発した人はかなりの衛士と聞いているんですけど、この作戦に参加しているんですか？」

激震の試験映像を見て衝撃を受けた、あの操縦技術はどの教本にはない、化け物じみた機動で次々とドローンを落としていった、あれは本当に人が乗っているのか？と思うくらいの操縦だ、しかもあの激震に乗っていたのはOFタイプの開発者と言われたのも驚いた

『副指令が言うには、極秘任務中で作戦に参加していないと言っていた』

どんなやつだろう？周りから少佐と言われる奴だから案外、かなりの年がいったおっさんだろうか？

『さて、お喋りはここまでのようだな』

伊隅隊長が言うとセンサーに反応が出てきた

「BETAども、俺たちの町を返して貰うぞ！！」

A―01の不知火が人類の敵に向かって行く、まるで穢れた大地を浄化する如く、戦線を引き上げていた

—司令部—

モニターを監視する人、インカムから情報を聞く人たちが驚いていた
横浜ハイヴの戦線を南北から少しずつではあるが押し上げて行く
司令部の高官たちは驚きを隠せなかった

「この短時間で戦線を押し上げるとは……」

「この新装備のデータを送った開発者の執念と言つか怨念だな……」

ここでも、流した噂が出回っていた、すると仙台臨時政府から通信
が入る

司令部の大型モニターに一人の軍服の上に医者とか着そうな白い上
着を着た女性が映し出される

『いかがでしょうか？新装備に改修した戦力は？』

「香月博士、これほどの戦果をあげるとは、凄まじい装備ですな！」

香月博士は悠々と語るが言葉の奥に皮肉が交じっていた

仙台臨時政府に呼ばれていたが「どうせ、官僚たちの愚痴を聞くだ
けでしょう」と言って駄々をこねて行きたくなかったらしい

まりもたちの説得？でなんとか仙台臨時政府に行き、明星作戦をモ
ニタリングしていた

『それは良かったです。それより、軌道降下部隊はどうですか？』

「あと、二、三時間で目標の降下ポイントに着きます」

香月博士は考えていた

軌道降下部隊はG元素を確保するための部隊だ、残り二、三時間で軌道降下部隊よりも早く、A-01がハイヴのゲートを確保して地下茎構造に入らなければならないがあ国がアレを使うことも考えないといけない

ふと思いつく、この世界の技術を飛び越したテクノロジーを持ち、並外れた操縦技術でこの世界の戦術機を手足のように動かして常識つてなに？という存在事体の人物がこの作戦になにかやらかすのでは？

そのころ、常識つてなに？という存在のアスカは戦場から離れた太平洋の海底にいるトレミーの格納庫に置いてある『秘密と領域と至高の神秘の天使』の称号を持つ7大天使の名を持つガンダムのコクピットの中で作業していた

「なんか、色々と言われた気がする……」

「キニシタラ、マケ！キニシタラ、マケ！」

「とりあえず、戦場への下準備が終わりしだい行くぞ、ハロ」

「リョウカイ！リョウカイ！」

「ラジエル、再チェック完了、ヴェーダのリンク開始」

―GN-XXX ガンダム ラジエル―

このガンダムは、戦場のような特殊な環境での情報収集が目的で開発されたために武装は最低限のものしかない。その分GN粒子の消費量は抑えられており、長時間の運用が可能な機体である

「ヴェーダへのリンク完了。トレミー浮上開始！」

何も無い海上から一隻の戦艦が浮上する

「トレミー、第一デッキを開放。ラジエルをカタパルトデッキへ。機体固定、確認。射出タイミングをトレミーからラジエルに譲渡、確認。」

ガンダムラジエルの最大の特徴である両肩に搭載されている大型のGNバーニアが唸りを上げ始める

「ガンダムラジエル、アスカ・サクラザキ、これより戦場を監視する！」

トレミーから緑の粒子を放出する一機のガンダムが人知れず戦場向かって羽ばたくように出撃した

第十一話（後書き）

ラジエル採用させていただきました

第十二話（前書き）

この小説は
作者の妄想、作者の閃き、感想のアイディア
の提供でお送りします

第十二話

第十二話

アスカ SIDE

緑の粒子を出す機体が低空飛行させながら、BETAに向かっていくレーザー級がレーザーを照射するが機体を縦に一回転させ回避をする

「さすが、00ガンダムの開発の参考になった機体、機動力高いな」

両肩に搭載されている大型のGNバーニアを巧みに使いこなしながらレーザーを回避しながらBETAに向けてGNビームライフルを撃つ、突撃級に当たり真ん中に穴が開き突撃級が倒れる

「直接的な戦闘を想定していないからやや出力は押さえ気味か、ハロ、今のバレていないよな？」

「バレテナイ！バレテナイ！」

「よし、次行ってみよう！」

バレていないんなら帝国の援護にいきますか！

アスカ S I D E E N D

—司令部—

モニターに映し出されている帝国軍とBETAのマークにCPの女性が困惑していた

隣のCPの女性が気がついて声を掛けてきた

「どうしたの？」

「このモニターのBETAのマークが変なんです、後方でBETAのマークが少しずつ消えているんです」

「この辺りに味方の部隊はいないから、後方の艦隊の支援砲撃でマークが消えているんじゃないかしら？」

「そうなんです、私はてっきり新型のセンサーの故障かと思っていました」

「新型のセンサーは何度も試験されたから大丈夫よ、ほら通信が着ているわよ」

「あ、はい。こちらCP、何かありました？」

それは、故障でも後方の艦隊の支援砲撃でもない
後方いるBETAのある一部が倒されていくのであった

「はああああー!!」

赤い武御雷が長刀を上段に構えて突撃級に振り落とす、突撃級は綺麗に竹ように二つに割れていた
長刀に付いたBETAの体液を振り払い、刃をみても刃こぼれが一切していない

「これほどの切れ味をだすとは、おそろしい物を作り出したな、桜咲」

誰もいなく、独り言をぼやいていると通信が入る
どうやら近くの部隊がBETAに襲われているらしい

「神代、巴、戎、これより、部隊の救援に向かうぞ！」

『『『了解!』』』

月詠中尉が水素プラズマジェットを噴かせる、そのあとに三機白い武御雷が着いて行く、BETAに襲われている部隊に救援に向かう
とかなりの数の要撃級を相手にしていた
すかさず、電磁投射砲を構えて、要撃級に向かって撃つ

「こちら、斯衛軍。援護する」

『「う、斯衛!?! 援護、感謝します!」』

「そちらの部隊の状況は？」

『わが部隊は、第三中隊を失い残りの中隊で部隊を編成させました』

月詠中尉が部隊を見てみると至る所に装甲や武装が痛々しい状態であつた

この部隊はこのまま前線で戦うのは無理だと判断した

「貴官らの機体はだいぶ消耗が激しい。ここは斯衛が受け持つ、貴官らは撤退を開始しろ」

『了解しました、全機これより撤退を開始する！』

『隊長！03がBETAに囲まれて撤退が出来ません』

『な、なんだと！？』

センサーを見てみると、一機だけBETAに包囲されつつある

『まずい！03、早く脱出しろ！』

『りよ、了解！』

あの激震は脱出しようとして突撃砲を撃つが要撃級に掠るだけ、BETAに囲まれてあの衛士は錯乱状態になって冷静に対処できていない

「く、あれでは間に合わない、私が行く！」

跳躍ユニットを最大出力にして孤立している一機に向かう
激震は倒れ要撃級は前腕を死神の鎌のように振り上げる

『いやあ、こないで……………!!』

要撃級の前腕が激震のコクピットを目掛けて振り落とす
スローモーションのように網膜投影システムから送られる映像、目の前には死という絶望が迫ってくる

『いやあああああああ!……………えっ?』

突然、要撃級が倒れ地面が爆発した、そして次々と周囲にいたBETAに穴が空けられていく

「なにが、起こったのだ?」

月詠中尉は目の前の不可思議な現象に困惑していた
味方が援護したわけがなく、囲まれている激震に一番近くに居るのは月詠中尉で電磁投射砲の射程範囲外で射撃していない
我に帰り、通信を繋げる

「03、大丈夫か?」

『は、はい』

激震が立ち上がり撤退を開始した、武御雷は激震の前に立ち激震に向かうBETAに向かって射撃をする
リーダーにも異常がみられない、誰が射撃しようにも射程範囲外だ、倒された要撃級を見ると穴の周りが焦げていた、なにか高熱で空けられた跡だった

月詠中尉はある一人を思い浮かべた

「ハロ、桜咲に通信を」

「リヨウカイ！リヨウカイ！」

こんなことをやるのはこの世界でただ一人しかない
武御雷のコクピットはハロが搭載できるよう改造されており、網膜
投影システムを使いアスカに特殊回線を繋げる

「どうゆうことが、説明してもらっぞ！」

『プライバシーの侵害になるので秘密です』

他人の情報を見ている、お前が言っな！！

アスカはこの作戦に配備されている全てのEセンサーを改造していた
普通に渡すわけでもなく、ヴェーダによって複雑に改造をしてガン
ダムなどをセンサーに反応させないようにした、さらにヴェーダを
使いこの作戦行動中のすべてをハッキングしてアスカが行動しやす
いように全ての目を欺き、人知れず戦場に介入していた

「…プライバシーとは、何だ？」

『（そこから！）私生活上の秘密と名誉を第三者からおかされない
法的権利の意味です、そろそろ行きますので失礼します』

「あ、まだ聞いていないぞ」

『最後に一つ、後方にいるレーザー級と要塞級だけは倒しました』

「なんだと？」

最大望遠で見るとBETAの死骸が散乱していた、要塞級に何個か穴が開いてレーザー級は斬られていた

「いったい、何をしたのだ？桜咲 アスカ」

通信が切れていた、誰も答えなただ聞こえるのは雑音だけ…

アスカ SIDE

レーザーがラジエルに向かって照射されるがラジエルは避ける、次々とレーザーが照射されても避け続ける、周りから見れば艦隊の支援砲撃を追撃していると見られていた

「しつこい！ウザい！邪魔！」

A-01のみんなは大丈夫だろうか？

ハロに頼んでA-01の状況を見るとゲートを確認していないらしく、別のところで軌道降下部隊がゲートを確保して地下茎構造に潜入しているらしい

「ハロ、通信の傍受を開始して」

「リョウカイ！リョウカイ！」

どうも、いやな予感がする、通信を聞いて見ると……

『こちら、05このハイヴかなり深くないか？』

『こちら、08こつちも同じ状況だ、このハイヴはフィイズ2以上あるんじゃないか?』

『了解した、全機撤退せよ、これよりHQに連絡する』

横浜ハイヴがフィイズ2以上だと!? しかも軌道降下部隊の撤退、G元素の確保を諦めたまずい、あの国が『あれ』を使う可能性が出てきた

「ハロ、装甲駆逐艦のハッキングは!？」

「アト、スコシ!アト、スコシ!」

アスカ SIDE END

アメリカ SIDE

横浜ハイヴを攻略している場所から離れた太平洋にいる米国艦隊に乗艦していた高官は驚きを隠せなかった

「なんなのだ、この力は?」

自国の国土を半分がBETAに制圧され戦力が疲弊されているこの国がどの国が成しえなかったハイヴを攻略しようと戦線を押している

戦線を押しているのは噂になっている新装備、初めはたかが改

修で戦力の増強にもならんと思っていた

「なんなのだ？あの武装は今までの兵器を越えている、それに跳躍ユニットまでもがいままでとは違う」

軌道降下部隊から連絡が入る、どうやら横浜ハイヴはフィイズ2以上であるという可能性が出てきた

全ての計画が狂わせてしまった、ならばG元素を渡すわけにはいかない！！

「統合軍総司令官に連絡を新型のG弾の使用許可を……！」

「了解しました」

――統合軍総司令部――

仙台基地を越えるモニターの数、何百人ほどのCP、中央の大型モニターに映るのは横浜ハイヴの映像と衛星軌道上に展開されている再突入型駆逐艦（H S S T）の映像だ

「統合軍総司令官、太平洋に展開中の艦隊から連絡で新兵器の使用許可の要請されています」

「予定よりも早いな、では新型兵器の使用許可をする！」

統合軍総司令官が端末機を操作すると端末機から小さな正方形の箱が出てきた、統合軍総司令官が箱を開けると鍵の差込口が出てきて統合軍総司令官は金属で出来ているアタッシュケースの中から鍵を取り出した、鍵には文字が彫ってあった

―オルタネイティブ 5―

統合軍総司令官は静かに鍵を差込、鍵を回すと……………何も起こらない

「……………」

統合軍総司令官は鍵を外し、もう一度鍵を差込、鍵を回す、またしても何も起こらない

何度も鍵の差し入れをやっていると周りからクスクスと笑い声が聞こえてきた、統合軍総司令官はわざと咳払いをさせ、周囲を静かにさせる

「どうなっているのかね？」

「システムに障害が発生中でこちらからのアクセス権限が認められていません」

近くに居る、HQの女性が困惑しながらも答える

統合軍総司令官は装甲駆逐艦の情報を見てみると装甲駆逐艦はこちらの側からのアクセスが出来ないらしい

「こちら側からの制御が出来ないのなら、撃墜させる」

統合軍総司令部の統合軍総司令官以外の全員が統合軍総司令官を見る若い高官が統合軍総司令部の全員が思っていることを口にする

「装甲駆逐艦の撃墜？アレには乗組員が居ます」

「アレは無人機だ、人が乗って居ない」

統合軍総司令官は嘘をついていた、装甲駆逐艦には乗組員がいた
若い高官は気づいていたが上官の命令に逆らえず、装甲駆逐艦を無
人機として扱うことにした

装甲駆逐艦の乗組員の全員は名誉の死として二階級特進されて、真
実が闇に隠されるだろう

アメリカ SIDE END

アスカ SIDE

「えっ！？なんで……？」

衛星軌道上で装甲駆逐艦が撃墜された、人が乗っているのに……

「そこまで、やるのか……五番目。ハロ、ヴェーダに計算して撃
墜された装甲駆逐艦の落下時間を算出してくれ…あと、特殊回線で
退避勧告をだしという……」

「リヨウカイ！リヨウカイ！」

全てを滅ぼすつもりか、五番目！！

帝国から米国が新兵器を使用したという警告が全軍に知らされて退
避勧告が発令された

「リミッター、カイジョー！リミッター、カイジョー！」

「!？」

A―01の誰かがOFタイプの制限を解除した？
急いで伊隅大尉に連絡を入れる

「伊隅大尉、一体なにが起きた？」

『桜咲少佐、極秘任務で作戦に参加されて居ないはずでは!？それより、その格好は?』

「そんなことは後回しだ、退避勧告が発令されたはずだ!早く撤退をしろ、なにか問題でもあったか？」

『鳴海少尉が一人でBETAに向かいました……』

あのヘタレええええ、死ぬ気か、個人情報で見たが二人の女性に告白されて未だに答えていない、羨ましい……もといヘタレめ!

「俺が連れ戻しに行く!」

『少佐が!?』

「今の状況を見てもA―01の推進剤がかなり消費していて退避するだけしか残っていないだろ、こっちは鳴海少尉に近い所にいるから連れ戻したらすぐ退避する」

『了解しました、どうした?平少尉』

『すみません、少佐、考之を連れ戻してください、あいつ意外な所で馬鹿なので……』

「平少尉、友達想いだな、あのヘタレは必ず連れ戻す！今は生き延びることを考えていればいい」

『了解』

あのヘタレ、色んな人を困らせてただで済むと思うなよ

アスカ SIDE END

一機の不知火がモニメントに向かっていく、不知火の前には1000以上のBETA群がいた、誰も見たら逃げるだろう。

しかし不知火は跳躍ユニットを吹かせながらBETA群にありえない速度で急接近する

「うわああああ！！」

OFタイプに搭載されている改良型の電磁投射砲を連射するが機体の速度にロックオンが追いつけず、BETAにとって致命傷にはならない

鳴海は制限を解除した不知火に何度も気を失いそうになった、コクピットに警告音が鳴り響くが彼の耳には届かないであろう

「死なせない！俺たちの町でこれ以上、死なせたくないんだあああ！！」

鳴海は忘れていた制限を解除したらもう一つのデメリットを…

「！？なんだ、急に動かなくなった？」

不知火OFタイプには制限が掛かっている、一つは強化装備を着ていてもかなりのGが掛かることもう一つは燃費が悪いことを踏まえてアス力は安全性を考え制限を掛けていた

「動いてくれよ……」

懺悔するように祈っても不知火が動くわけでもない、内部電源をみても後僅かで切れる

なんとか生きているセンサーを見るとBETAに囲まれている、たとえBETAから逃げ延びても新兵器に巻き込まれて死ぬだろう

「遥、水月、ごめん……」

いままでのことが走馬灯のように頭の中に流れてくる、最後に気がかりなのは二人に返事を返していないこと……だが、たった一言でシリアスなことを破壊した

『リア充、爆破しろ！』

「！？？」

BETAしかいないこの戦場で人の声が聞こえた

『チヨリース！ヘタレ発見。生きているか！』

空気を破壊する人物が追いついてきた、BETAの中を掻い潜り不知火の周囲のBETAを一掃していた

「あ、あんたは、いつたい？」

『話はあとで、こっちの機体に跳び移れ！』

鳴海が不知火から恐る恐る出てみると緑の粒子を出す機体があった
まるで天使が舞い降りた光景だった

鳴海がラジエルのコクピットに入り、アスカの後ろに移動した、鳴海は驚いていた目の前のモニターから機体の情報が映し出されている、それにアスカが着ているパイロットスーツにも興味津々だ

「後ろに居てくれ、前に出ると八口に当たるから」

「ヘタレ、ゲンキ？ヘタレ、ゲンキ？」

「じゃ、喋った！？」

いきなり、右前にいるオレンジの球体が喋りだしたのだ

鳴海が喋ろうとした瞬間、警告音がコクピットに響き渡る

「Eセンサー反応、こいつは！？」（帝国の情報ではこいつは確認されていない！）

ラジエルの目の前に母艦級が地面から飛び出してきた

母艦級は口を広げ、ラジエルに襲い掛かる、アスカはさすがGNライフルで対抗するが致命傷には届いていない

「なんなんだ、こいつは？」

アスカは答えない、今のアスカは喋る余裕がない、前には母艦級、後ろにはG弾、制限時間ありで打つ手なし最悪だ

―異物……………混沌……………排除……………―

「!?(今のは?)」

「どうしたんだ!？」

アスカは一瞬動きが止まり、再び動き出すとモニターに母艦級の口が映し出されていた

母艦級は口を広げたまま地面に激突した

煙が晴れると母艦級は飲み込んだ物を吐き出したがラジエルの残骸が見つからない

突然、左右から粒子ビームが撃たれ母艦級に穴が開き苦しみだした

母艦級の上空に赤く発光したガンダムラジエルがいた……………

第十二話（後書き）

アスカがアレを発動させました

第十三話（前書き）

明星作戦は完結します、ここまで来るのは長かった……

まだ、半分も行っていない

え！？

第十三話

第十三話

アスカ SIDE

天と地の狭間に赤く発光した天使がいた、地には天使を睨みつける人類の敵がいる

「高濃度圧縮粒子開放？まさか、これって『トランザム』！？」

小型のディスプレイは赤くなって、ある文字が表示されていた

—TRANS—AM—

機体内部に蓄積されていた高濃度圧縮粒子を全面開放することで、一定時間スペックを3倍以上にすることができるとラジエル、ヴァーチェなどの機体はこのシステムを前提に作られていない、トランザムが終わればラジエルなどの機体は機体性能が低下する、いわば両刃の剣だ

「ハ口、起爆までの時間は！？」

「3分！3分！」

カップラーメンが出来ていた時間か……

そんなに待てるほど余裕が無いな…母艦級を30秒以下、脱出を2

分以下にしないとだめだな

「ハロ、脱出に最適なルート算出!!」

「リヨウカイ!リヨウカイ!」

母艦級に向かってラジエルを加速させる、母艦級は再び口を開け攻撃態勢に入るが無数の粒子ビームが前後左右に襲い掛かる

「はああああ!!」

母艦級は為す術がなく、ただ口を閉じて天使の攻撃を耐えるしかないレーザー級がラジエルにレーザーを照射するがラジエルは其処にはもういない、レーザーは空に向かって放たれただけ、レーザー級の一体が突然倒れて他のレーザー級が倒れたレーザー級を見ようとすると目の前に粒子ビームの光がレーザー級に当たる、別なレーザー級が後ろを振り返るとラジエルがいたがレーザー級は動かない、レーザー級は二つに斬られていた

「これで、終わりだ!!」

口を閉じている母艦級の口をGNビームサーベルで十文字に切り裂き母艦級の体内に侵入する

母艦級の中から外へ無数の粒子ビームが放たれ母艦級は倒れて体内からラジエルが飛び去っていく

「ハロ、全ての粒子をGNバーニアに!!」

「リヨウカイ!リヨウカイ!」

衝撃波をやり過ごして何分経過したんだろう？

顔を上げ、モニターを見ると何もかも吹き飛ばされた大地が広がっていた、ただあるのはここが町だったのか？という跡だけだ

「これがG弾の威力……」

ふと思い出し、後ろにいるヘタレを見ると気絶していた、不知火のリミッター解除とランザムの発動などで気絶したんだろう

このまま鳴海少尉を返したらラジエルがバレル…仙台基地にもどる間に記憶を消して眠って貰おう、リミッター解除と他の人を困らしたからこの位はいいだろう

「ハロ『鳴海少尉は回収して退避した、応急処置をするため鳴海少尉は少し預かります、仙台基地に戻ったら鳴海少尉を戻しますので安心してください』ということを伊隅大尉に連絡して、それとトレミーに医療用カプセルの準備を」

「リョウカイ！リョウカイ！」

アスカ S I D E E N D

アメリカ S I D E

ホワイトハウスのとある会議室、モニターに映し出されているのは横浜ハイヴを壊滅に追い込んでいるG弾の映像だった

「これほどの威力とは…ろくに結果を出さない四番目とは違いますな」

「モニュメントを簡単に吹き飛ばすほどの威力、素晴らしいですな大統領」

「統合軍総司令官、良くやってくれた。これで我々の計画は支持されるだろう」

会議室にいる誰もがたった二つのG弾がハイヴを潰す映像に納得していた、しかし統合軍総司令官は黙り込んでいた、何事と思い全員が統合軍総司令官に顔を向ける

「どうしたのかね、統合軍総司令官？装甲駆逐艦のことはただのシステムの障害と聞いているが、君が病むことはない」

「いえ、それではないのですが…オペレーション・ルシファーで気になることができました」

「気になること？何か問題でもあったのかね？」

統合軍総司令官は映像を切り替え明星作戦に参加していた帝国の何も変哲がない激震を映し出した

初めは何かの冗談かと思って統合軍総司令官以外の全員が笑っていたが映像を見ていくと全員が映像に釘付けになっていた
その激震はフラッグの技術を転用した激震Fタイプだった

「バカな、あのジャップがこんなものを開発していたと聞いていないぞ」

「親米派でもこんな装備の話は聞いていません」

「あのサイズでレールガンを装備だと!？」

「跳躍ユニットの推進剤がまだ切れていないだと!？」

「ダイヤモンド以上ある硬さのBETAの装甲が簡単に切り裂いた!？」

全員が驚きを隠せなかった、映像に映る激震はBETAを圧倒していた、なぜ帝国は横浜ハイヴ攻略を国連議会で提案した理由が分かった
大統領は映像のことを真摯に受け止め、統合軍総司令官に顔を向き直す

「これが気になることかね、統合軍総司令官」

「はい、疑いましたが事実です」

「なるほど、この装備の開発者を帝国から譲渡することは出来るかね？」

「それがですね。大統領、開発者は亡くなっており設計図がどうやら魔女の所にあるのです」

「四番目が関わっていたとは、我々は手出しできないのか…」

「その設計図をなんとかしても入手しないと四番目が支持されそうだ」

「諸君、国連からその設計図を譲渡することにしよう、すべては我

々の計画のために」

突然、ドアがノックされ一人の男性が慌てて入ってきた、息が荒く、額には汗が流れている

「今は、会議中だ！外へ出ている！！」

「すみません！大統領、緊急事態です！」

「なにかあったのかね？」

「我が国のデータバンクが崩壊して各国に流失しました」

「な、なんだと！！」

アメリカが会議している30分前

アスカは横浜からトレミーに戻ってヘタレを医療用カプセルに入れてヴェーダにアクセスをしていた

五番目を有利にさせないと横浜で観測されたG弾のデータを消してダミーデータを書き換え大量のデータをアメリカに流し、セキュリティを完膚なきまで破壊してG弾のデメリット、アメリカが装甲駆逐艦を撃墜したことを流した

そのころ、ペンタゴンでは慌ただしく動いていた

「データ流失止まりません、さらに別のセキュリティが崩壊しました」

「データの流失をなんとしても止める！！」

その後、アメリカのG弾に関する一部のデータが流失され、国連議事に提示していた情報と異になり各国から批難を上げ、G弾の信用性と議会での発言力が地の底に落ちていった

アメリカ SIDE END

欧州連合 SIDE

とある会議室にイギリス代表者を中心にフランス、西ドイツ、イタリア、スペインなどが明星作戦に使われたG弾について話し合われていた

「重力の異常、農作物が育たない土地、これがG弾のデメリットです」

「これがG弾使用後の副次被害、これがヨーロッパ全土で使われたら奪還するどころか逆に人が住めなくなる土地に変貌してしまいますよ」

「やはり、五番目は危険だ」

「たしかに米国はハイヴが建設されていないがこれではこの星を滅ぼしてしまうのではないかね？」

「今は信用を失っていますがアメリカが有利になることは変わりません、各代表の皆さん次の映像をご覧ください」

スクリーンはアスカが流したG弾の情報から明星作戦に撮られた不知火が映し出された

その不知火は国連の不知火であるがアスカが手を加えたOFタイプであった

「イギリス代表、この不知火は一体？」

「この不知火は帝国が装備しているものより、機体性能など全ての面で高性能と分かりました」

「噂の装備に改良型があるだ！」

「これは何処の国連の部隊なのだ、イギリス代表？」

「……………四番目直属部隊です」

誰もが静まり返った、四番目といえば魔女がいる場所だ、OFFタイプを提供させようと交渉したら逆に理不尽な要求をさせてしまう誰もが無理と思って沈黙するとイギリス代表が沈黙を破った

「たしか灯台下暗しということわざが日本にありますが、わざわざ四番目に交渉させるのではなく、日本に交渉をしてはどうでしょうか？」

「日本に？どういうことだ、イギリス代表？」

イギリス代表以外全員が目を丸くした、なぜ四番目ではなく日本に？という疑問が出てきた

「四番目は日本が誘致した結果、日本主導の下で四番目がスタートしました、そして四番目の場所は日本です、今の日本はある問題を抱えています。それを踏まえて日本を経由して四番目を交渉してみるので」

「うまく、いくのかな？」

「日本が抱えている問題は四番目も影響しているのでうまく交渉に乗ってくれます」

その後欧州連合はOFタイプを提供させようと動き始めていた

欧州連合 S I D E E N D

アスカ S I D E

トレミーにある自分の個室で今までの出来事を考えていた

この世界はB E T Aをただ駆逐するだけではなく人類も問題があり過ぎだ、このままいくと自らの手で破滅するのではないかなにか分かり合う、きっかけがあればいいのだが……

月にレーザー級が確認、白銀消失、明星作戦中に突如母艦級出現そして謎の声

ハ口に聞いても謎の声は聞こえなかったらしい、GNを媒介して俺

の脳量子波を通して聞こえたのだろうか？

しかし、この世界は変だ、今まで存在されていない物が出てきたり、存在していた白銀が消失していた、まるで“誰かが、意図的に歪ましている”

「アスカ！アスカ！」

「なに、ハ口………？」

机の上にぽつんと一台の携帯型DVDプレーヤーが置いてあった

「なんでDVDプレーヤーがあるんだ、部屋に入った時には無かったはず？」

とりあえず、再生ボタンを押してみるとスパイ映画でよく耳にする曲が流れてきて画面には部屋が暗く顔が見えない黒いスーツを着た男性がいた

―桜咲 アスカくん、君にお知らせしたい情報がある。経験値が一定以上溜まったので制限が解除された、それと今後のために君の体には医療ナノマシンと特殊原子核が追加した、最後にこのDVDプレーヤーは爆発する、以上だ――

「色々とツツコミがある内容だぞ、つか原子核ってなに？トレミ―の中で爆発させるな――！」

突然、DVDプレーヤーが煙を上げて目の前が白く眩しくなっていた………

アスカ SIDE END

明星作戦から10日後、とある軍の施設に香月博士がガラス越しにベッドに寝ている一人の女の子を見つめていた
ベッドに寝かされているのは赤い色の長髪で大きなリボンをしている女の子で腕には点滴がされていた

「この子が唯一の生存者なの？」

「はい、捜索隊がハイヴ内部で見つけたそうで、他の人は全て脳と脊髄しか残ってなく調べた結果、全員死亡と確認されていました」

イリーナ中尉はカルテを読み上げていった

ベッドに寝かされた女の子は外傷もなく意識不明の状態で見えられた

「憶測ですがBETAに連れ去られ脳と脊髄にされる前にG弾の影響でBETAは機能停止になり殺されずに済んだと思われます。」

「偶然が生んだ、奇跡ね……」

「検査の結果、心拍数は安定していますが意識は戻らないままです」

「この子の名前は？」

「城内省に問い合わせた所によりますと、名前は鑑 純夏です」

第十三話（後書き）

純夏生存でも昏睡状態、何とかユニットは？という突っ込み厳禁で
願います

原作崩壊が着々と進み中、次は欧州へ行きます

この先の話に注意書き

作者はクロニクルズ02しかやってないのでこの後の話、変になります
ます

さらにアスカにはフラグを立たせますが作者は恋愛ヘタなのでかなり
変になりますそのことはご了承ください
彼女いない歴〃年齢を無礼るなああああ！！

作者の叫びです、どうぞ気にせずに見守ってください

第十四話（前書き）

この先の話は変です、ご注意ください
キャラ口調変、恋愛？など、話が合わない方は戻る事をかなりお勧めします

第十四話

第十四話

アスカ SIDE

―仙台基地、オルタネイティブ特有区画―

格納庫に金ピカのMSが格納されていた、その金ピカのMSは胴体だけで吊るされて誰がみても不完全な状態で置いてあった

「擬似太陽炉、起動開始」

コクピットで端末機を操作しながら金ジム（アルヴァアロン）の擬似太陽炉の起動実験をしていた
金ジムの背後から金に近い色の粒子が放出する
トレミーから持ってきた金ジムを戦術機などのパーツを使い、少しずつではあるが修復をしていた

「予算がない、食料生産率が悪い、技術だけはあるのに、はあ」

『はいはい、愚痴言っていないでさっさと作業を再開する』

香月博士、人のポ。リ飲まないでくれませんか、そろそろ無くなりそうです…

明星作戦にFタイプに改修した時に政府は予算を関係無しにつぎ込

んでしまった

そのおかげで帝国軍及び在日国連軍にも食料配給に規制が掛かり四
番目も影響を及ぼした

今では食事ができるのは朝と夜だけ……

『……起動テスト、終了』

『今日はここまでにしましょう』

「分かりました」

金ジムから降りて香月博士、社がいるコンピュータルームに向かった

「あの太陽炉はいつぐらい配備する予定なの？」

「そうですね、今の状態だと横浜基地の建設後になりそうですね」

明星作戦後にG元素はアメリカが極秘に接收され、Fタイプが有名
になり各国からうちでも作ってくれ、と言った話が出てきたが予算
と資材がなく、作れるか――！！

さらに制限が解除された情報は大使の情報でGN-？、ガンダムス
ローネシリーズ、アルヴァート・レ黄金便器などだった、CBとは別に分けられてい
るらしい

擬似太陽炉はかなり掛かったが金ジムを解析してトランザムは使用
できなかったが量産することが分かった、けど擬似太陽炉を世界に
拡散させるのは……

「で？あの悪趣味な機体は誰が乗るの？」

「そうですね、ヘタレあたりに乗せようかと思っています」

悪趣味って…趣味趣向を注ぎ込まれた大使の唯一のアイデンティティをそんなこと言わないでください、一樣『中ボス』なんで……突然、コンピュータールのモニターに伊隅大尉が映し出された

『副指令、緊急事態です！』

「伊隅、なにがあつたの？」

『PXで神宮寺教官が間違つてお酒を飲んでしまいました、いま総司令が臨機応変の対応で指揮をしています』

……はっ！？なんで緊急事態なの？ただ、まりもさんが間違つてお酒を飲んだだけで？

「まずいわ……」

「なにか、まずいですか？」

「まりもは帝国軍白陵基地時代からの付き合いで、昔まりもがたま酒を飲んでしまつて基地の半数以上の人をアルコール中毒で病院送りにして基地を壊滅寸前にまで追い込んだのよ、酔いがさめるまで誰一人まりもを抑えることが出来なかった、その後『狂犬』と呼ばれるようになったわ」

……まずくない？今、この基地は四番目とトレミーがある、その酔っているまりもさんが暴れだしたら此処も壊滅する可能性がある

「伊隅、なんとかしても止めなさい、これは人類の存亡に関わることで……」

『了解しました!』

「香月博士、俺もPXに向かいます!」

「ええ、そうして頂戴」

全力疾走でPXに向かったがそこは酒臭い狂気渦巻く場所だった…

……

「お酒、臭い。なんなんだ、この死屍累累とした場所は」

目の前には酒という毒にやられた人の屍が散乱していた
あたりを見渡しながら行くと後ろ姿の総司令がいた

「総司令!大丈夫ですか……!?!」

「……………」

声を掛けるが返事がない、只の屍のようだ…

前から見ると白目を向けて立っていた、思わず頬に涙がこぼれ敬礼
をした

「ご苦勞様です、ここまで指揮を執っていただきありがとうございます」

総司令がここまでがんばったおかげで最小限の被害に済んだかもしれない

さらに先に行くと先ほどモニター越しに会っていた、伊隅大尉が倒れていた

慌てて駆け寄るとまだ息があり、近寄ると危篤状態で息が荒い

「伊隅大尉!？」

「…少佐、神宮寺教官は強敵です。気をつけてください……」

「喋るな、まだ助かる見込みがある!」

「最後に…基地の外に植えてある、桜の木みたかったな……」

「伊隅大尉iiiiiiiiiiii!」

伊隅大尉は静かに息を引き取った

なんでこんなにいい人たちが先に逝くんだろう…

活気に溢れていた仙台基地が一瞬で壊滅するなんて酷くないか?

理不尽すぎないか、人が人らしく生きることが出来ないんだろうか?

全ての感情を集めるように手に力が入る

―死力を尽くして、任務をあたれ―

涙で濡れている顔を拭き、真っ直ぐ前を向き立ち上がる

―生ある限り最善を尽くせ―

酒の臭いがするほうに歩いていった、部屋に足音が響き渡る

―決して犬死するな―

周りには空き瓶が散乱していた一升瓶と杯を持って堂々と座り込んでいる『狂犬』の前に立つ、『狂犬』は気づき顔を見上げる

「桜咲くくくくく??」

駄目だ、完全に酔って呂律が回っていない

後には引けないここで負けたら基地が壊滅だ、ここから勝負だ!!

「神宮寺まりも軍曹、そろそろ部屋に戻りませんか？」

「部屋に行くの？」

「そうです、部屋です、ルームです、ハウスです」

「……………やだ」

「はっ？」

「もうすこし酒のむくくく」

「ですから、そろそろお休みになられてームゴ!？」

いきなり、口に一升瓶が入れられていた、口から喉を通して酒が入

つてくる

やばい、息が出来ない……

「口うるさいく桜咲！！飲め、飲んでしまえ！！」

「？。 @%＼\$&*（ちょっと、これ以上は…）」
お酒は20歳からです

何時間たったのだろうか？

いま俺は神宮寺教官にお酌していた、つまり負けた

「桜咲………次！！！」

「はい……」

これはいつまで続くのだろう……

仙台基地の酒が切れるまでののか？

オレは体の中にある医療用ナノマシーンでアルコールが分解され酔っていない

「桜咲くくくく」

「なんですか？酒は注ぎましたよ」

いきなり、頬に手を当てられ撫でられる、大人の雰囲気を漂わされて瞳か潤んでいる
一瞬ドキツとして顔が赤くなった心臓が高鳴り早鐘を打つが切なげに囁かれた

「桜咲、お肌綺麗ね。化粧しましょうね〜〜」

「はあああああ！？」

なに言っているの？この人は、バカですか？アホですか？常識をわきまえない人間ですか？この基地に化粧品なんて無いだろ！？
次の瞬間、まりもさんの周りに化粧道具一式が置いてあった

「なんで！？」

PXの入り口を見ると香月博士が「いい仕事をしたわ」という満面の笑みを浮かべて出て行った

「ええええええ！ちよつと待って！！」

香月博士の下に行こうとするがまりもさんに拘束されていた

「さあ、始めましょう！！」

満面の笑顔で死刑宣告され、化粧道具を取り出していた

オレ、オワッタ……

アスカ S I D E E N D

篁 唯依 S I D E

明星作戦が終わった後、ある噂が流れていた『欧州連合が国連の技術を提供させてほしい』と言う噂だった

だけど、私にある話が舞い込んで噂が事実になった

目の前にいるのは、私の父の親友あり瑞鶴の開発に携わった巖谷栄二中佐

「唐突だか来週の水曜日、模擬戦をやってもらいたい。相手は国連だ」

「唐突すぎます、なぜこの時期に国連と模擬戦しなければならないのですか？」

「篁中尉、自国の状況は理解しているだろう？」

「はい、財政悪化で食料配給率が安定していないのが分かります」

「そこに欧州連合から交渉があつた、物資の提供する変わりFタイプの技術を提供させてほしいと言うことで仙台基地の国連技術者を指名してきた。一部で自国の重要な交渉に国連技術者を派遣するわけにはいかないと騒ぎ出して急遽模擬戦をすることになった」

「その模擬戦に私が選ばれたのですか？」

「その技術官は衛士もやっていると言われて会議で唯依ちゃんが選

ばれたんだよ」

「お…お止めください中佐！今は任務中です！」

「いつもの巖谷おじさまと呼んでくれないのか……」

巖谷おじ様は落ち込んでいた

しかし、なぜ帝国技術官ではなく国連の技術官なのだろう？Fタイプだったら帝国にあるのだから帝国の技術官でも派遣すればいいのでは？

篁 唯依 SIDE END

仙台基地 SIDE

狂犬の被害で死にかけであつた人たちが呆然となつた、狂犬は目をパチクリさせていた

目の前に一人の女性？がいた

その女性は神々しく清らかでこの世の者とは思えない美しさでまりもの酔いがさめてしまうほど誰もが魅了していた

「……」

「うそだろ！」

「ばかな！？」

「信じられないわ!」

「さ、桜咲さん……ごめんない!？」

その女性は狂犬に無理やり女装させられた、アス力だった

「うっうっうっ……しくしくしく……」

誰もが女装したアス力思った……

――女神が降臨した――

「ありがたやゝありがたやゝ」

「おい、誰か記録しろ!」

「カメラ持ってきます!」

「脳内保存、脳内保存!」

「少佐、一生ついていきます!」

「ブルアアアアアアアアアアア！」

「アスカ、キレイ！アスカ、キレイ！」

「……アスカさん、綺麗です」（霞は子供のような悪意の無い純真に言った）

「そこ！！オレを置き去りにして勝手に盛り上がるな！写真は撮るな！録画するな！つか、先ほどから死んでいなかったか？ええい！酔いが覚めたなら着替えてくる！！」

「待ちなさい！！」

全員が声のしたほうへ向けると鏡を抱え込んだ香月博士がいた

「アスカ！今、その姿を放棄することは人類の可能性を一つ潰すことになるわよ！！」

「香月博士！？なぜ？人類の可能性？」

「あんたは自分の状況、分らないの？……鏡見なさい」

香月博士は鏡をアスカの前に置いた
アスカは自分の姿が映し出されている鏡を見ると……

「……………ぼっ／＼／」

「……………うおおおおおおおおおお！！」「……………」

「……………きゃああああああああ！！」「……………」

周囲に大歓声上がる

「まりも、よくやったわね」

「私はなんてことを…」

香月は笑顔で語り、まりもは自分が起こした惨劇に慌てていた
アス力は最後の砦を防衛する如く、壁に頭を打ちつけていた

（なぜ、女装した自分に惚れなければならない！）

「アス力さん…何をしているのですか？」

「社、アス力は自分の存在を守ろうと必死なの、そつと見守りましよう」

その後、仙台基地の壊滅は未然に防がれたが次の日は大半の人が二日酔いで基地の機能がしていなかった

アス力は女装の時に撮られたデータを全て消したと思っていたが裏で女装させられたアス力の写真が高値で取り引きさせられ仙台基地に魔女の他に女神がいると噂になり、A-01は女神がいることにちなんで『伊隅ヴァルキリーズ隊』と改名された

さらに悠陽はアス力と呼びだし、服を着せ替えようとしたことは余談である

仙台基地 S I D E E N D

― 帝国軍 演習所 ―

天気は雲一つない青さで演習所の真ん中に山吹色の武御雷が堂々と立っていた

演習場から離れた観客席には日本帝国を代表する重鎮たちが演習所を見ていた

「しかし、国連の技術官殿はまだ来ないのですか？香月博士」

「もう少し、お待ちください」

高官が香月博士に尋ねていた、一向に模擬戦の相手が姿を見せない。模擬戦開始まで10分を切っていた
誰もが普通の戦術機が来ると思っていたが突然空を切り裂くような音が聞こえてくる

「なんだ？あれは！？」

演習場にいた人たちが音の聞こえるほうに視線を向けると漆黒の戦闘機が近付いて来る

だがその漆黒の戦闘機は明らかに異常だ、機首にはリニアライフルを装備して機体の主翼が小さく、尾翼が大きい、そして胴体が普通の戦闘機の二倍くらい大きかった
高官は司令部に通信を繋いだ

「司令部！あの戦闘機は、なんだ！？」

『識別は国連と表示され、国連から送られた情報では今日の模擬戦

の相手みたいです』

「戦術機の相手に戦闘機だと!？」

「香月博士、なにかの冗談ですか？」

「いえ、冗談ではありません。あの機体が相手をします」

全員が驚愕した、第三世代の武御雷の模擬戦をするのはただの『戦闘機』だった

漆黒の戦闘機のコクピットに座っている操縦者はユニオンの特徴である白を基調としたパイロットスーツ

その操縦者は通信を繋げずに模擬戦の相手に向かって勇ましく言った

「はじめましてだな、武御雷!! グラム・エーカー、君の存在に心を奪われた男だ!」
注意、アス力です。

第十四話（後書き）

武御雷VS名（迷）言製造機、変態方向に進むかも……たぶん
アスカは月ハイヴ攻略前と同じ症状が出ましたので気にせず

第十五話

第十五話

公仮面？ SIDE

空は蒼天の青さで私は胸の高鳴りを抑えることは出来なかった

この模擬戦の相手はインペリアルロイヤルガードの武御雷だ、世界でもトップクラスの高性能戦術機であると同時に日本帝国国務全権代行征威大將軍を守護する剣と相見えるとは乙女座の私にはセンチメンタリズムな運命を感じられずにはいられない

模擬戦開始のブザーが鳴り、山吹色の武御雷はリニアライフルを構え、射撃をした

「あえて言わせてもらおう、グラハ。・エーカーである！」 注意、アス力です

私はカスタムフラッグを巧みに操縦しバレルロールで回避した

『！？』

武御雷の衛士は驚いていた、リニアライフルの弾をすんなりと回避したのだ

カスタムフラッグは武御雷の周りを旋回しながら攻撃をしていた

「操縦に感情が籠っているな、若いとみた！ならば、そちらの土俵に上がらせてもらおう！！」

カスタムフラッグを武御雷に急接近させる、武御雷は特攻だと思い
長刀を上段に構えて振り落とした

「人呼んで、グラ。ムスペシャル!!」

公仮面? SIDE END

武御雷の長刀は空気を切り、目の前に黒いMSがいた
ありえない光景だった、ただの戦闘機が戦闘機に変形した、しかも
空中で変形をやったのけたのだ

「戦闘機から戦闘機に変形した!？」

「香月博士、あの戦闘機は一体？」

「殿下、あれはFタイプの元になった機体です」

「あの機体が……」

悠陽は再び、演習場を見ると武御雷は長刀を再び振りかざし、カス
タムフラッグは二本の短刀で受け流していた

唯依は驚いていた、この機体はいきなり、目の前で変形して接近戦
で挑んできた

何度も長刀で打ち合いをしているのにカスタムフラッグは短刀で長
刀の軌道を逸らし続けていた

「軌道が読まれている!？」

唯依は焦りながらも目の前の戦術機を考えていた
速さがあるのに威力が無い、こちらを誘っている？と思った瞬間、
長刀が宙を舞っていた

「え!？」

公仮面？ SIDE

「こちらの誘いにつてこない？身持ちが固いな、武御雷！」

機体の性能差ではあちらが有利。そんな道理、私の無理でこじ開ける！

カスタムフラッグは二本の高周波ブレードの威力を弱め、さらに早く攻撃をする

武御雷がよろけて隙が出来たところに……

「ハム、パンチイイイ！」

武御雷の長刀を持つ手にカスタムフラッグは拳を振り上げ、長刀を空へ飛ばした

「今日の私は阿修羅すら凌駕する存在だ！」

手元にある武装を捨て空中の長刀を掴み、武御雷に向かって振り落とした

「え？」

目の前を見ると山吹色の武御雷のコクピット近くで長刀が止まっていた

「え、？どうなつての、これ？？」

今の状況が分からない、なんでカスタムフラッグに乗って武御雷と戦っているの？

模擬戦は明日のはずでは？

今までの状況を確認しよう

まず模擬戦の前日、緊張して眠れなくヴェーダを使ってなにか安眠できる方法を探してヴェーダが推奨した心が落ち着く音楽を流し寝て目が覚めると今この状況……

「なにが起きたんだ？え、通信？香月博士？」

『やっと、通信が繋がった。アスカ、終わったわよ。そろそろ降りて来なさい』

「あ、はい」

言われるまま、長刀を下ろして機体から降りた
カスタムフラッグから降りると驚愕されていた

「あの強化装備は、一体？」「若い衛士だと！？」「これは驚いた」

香月博士は目の前に立った

「では、ご紹介しましょう、アスカ」

「はい、私は国連太平洋方面第11軍仙台基地所属、技術官兼開発
衛士を担当しています。桜咲 飛鳥です」

アスカ SIDE END

篁 唯依 SIDE

目の前の全身を強化装備で包まれた人は私と同じくらいの歳だった

「あの、聞いてもよろしいでしょうか？」

「はい、なんでしょうか？」

「あの機体は一体？」

「あれですか？名前はカスタムフラッグ、昔の試作機ですよ」

「あれが試作機ですか！？」

驚いた、戦闘機から戦術機に変形する機体は聞いたことはないけど最新の武御雷をあそこまで追い詰めるなんてこの機体とあの人はすごい

「なんでこの機体は量産されていないんですか？」

「この機体は空中戦仕様でBETA戦に向かなく、量産されずに仙台基地の倉庫に眠っていましたが、今日の模擬戦のために出してきました」

今のアス力は『乗れる機体が無いのだ』太陽炉搭載型の機体は表に出すわけにはいかず、激震はあるのだが今後の開発のために分解されている、そしてトレミーの資材と設計図をもとにカスタムフラッグを作成したのだ

「その強化装備は一体？」

「これは、試作段階の強化装備でまだ実用化されてなく今はテスト中です」

帝国にとっては悔しいかもしれないが仙台基地は色々と開発している、だから欧州連合は帝国ではなく仙台の国連を指名した

篁 唯依 SIDE END

アス力 SIDE

香月博士は高官たちに簡易に説明していた

山吹色の強化装備を着た女性が色々質問されて話せる範囲のことを喋った

記憶には無いが空中で変形したことは驚いていたらしい
本当になにがあったんだ、オレ？前にもなにかがあったような……

「名前まだでしたよね？私の名前は篁　唯依です、階級は中尉です」

「私はさっき名乗りましたが桜咲　アス力で階級は少佐です」

「少佐！？とんだ後無礼をお許しください」

階級って差別されるものなのか……

「謝らなくていいです。少佐というのは只の肩書きだけなので」

「ですが……」

「歳も近いようですから、かまいません」

「でも……」

「そこのお二人さん、いつまでやっているのかね？」

周りには誰もいなくて声がした方に振り向くと顔に傷跡がある男の
人がいた、階級を見ると中佐

「「すみません、中佐」」

「わははははは、声をそろえるとは思えなかったよ、桜咲くん、
唯依ちゃん」

「ちゅ、中佐。また名前で呼んでは困ります」

「自己紹介がまだだったな、巖谷 栄二だ。よろしく」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

「ところで君は『一人』かね？」

「あ、はい。一人ですか……？」

「ほう、『一人』か。よかったね、唯依ちゃん」

「中佐——！？」

なんで一人？唯依さんの顔がトマトのように赤くなって巖谷中佐は笑っている

例えるなら他人に親が間違ったことを聞いて子供が恥ずかしいことになっている状態だった
今日はわけが分かん

その後、香月博士に記憶がない時に自分に言動がないか？と聞いた
ら「いつも道理、変だったわよ」と言われた（泣）

アスカ SIDE END

ドーバー基地 SIDE

銀色の髪の男は渡された資料を眺めていた、一つは日本帝国斯衛軍、二つ目は国連太平洋方面第11軍の情報だった

「会議でEF-2000（タイフーン）の改修をすることが決まり
実用試験をするために資料が書いてある二人を君のツェルベルス大
隊に派遣することになった」

「日本帝国斯衛軍と国連太平洋方面第11軍の二名ですか…」

「国連の方は、極東で騒がれている電磁兵器を関わっている国連技
術官で帝国は補佐で来るそうだが、二人とも若いが技術官の他に衛士
をやっている。君の部隊にはいい刺激になるだろう、ヴィルフリー
ト・アイヒベルカー少佐」

「了解しました、総合指令」

ドーバー基地 SIDE END

アスカ SIDE

―仙台基地、格納庫―

目の前にはコンテナが二つ並んでいた。
一つ目のコンテナは不知火OFFタイプ、中身は完全ブラックボックス

スでデータはプロテクト済み

そのままOFタイプのデータを渡すわけにはいかず、現地のEF―2000の実働データを確認してEF―2000に合ったプランで改修しなければならない

そして二つ目はもしもの為の『切り札』、嚴重にセキュリティを何重にも掛けて偽装した。

今回はトレミーを使うつもりはない、国連大西洋方面第1軍ドーバー基地群は各軍の軍事拠点であり海峡を挟むとBETAの勢力圏内で海底に隠しておくわけにもいかない

「少佐、不知火と大型電子機器の積み込み終了しました」

「あ、どうもご苦労様です」

「しかし、少佐も凄い所に行きますね」

「凄い所？」

「ツェルベルス大隊ですよ、グレートブリテン防衛線で全欧州軍が投入され生き残った七英雄の部隊に行くんですから」

「その七英雄って呼ばれているのはプロパガンダだったような……」

「ええ！そうなんですか？」

「本人たちはどんなこと思っているとかは知らないけど、本質を見ないで偏見的看着してしまうのは嫌だな」

「そうですね、少佐も女「なにか、言った？」いえ、何でもありません」

「とりあえず、ドーバー基地に持っていく物はこんな物だな。そういえば、不知火のシートのビニールだけが綺麗に剥がされていたんだけど？」

「それは副指令が外して이었습니다。神宮司軍曹が言うには新しいシートを剥がすのが好きみたいで天才の思考がどうたらこうたらと言っていましたね」

梱包する時のプチプチとか潰すの好きそうだな〜後で渡して置いとくかな？

「少佐、ドーバー基地に同行してくれる人はなんでも斯衛からも出向してくれるらしいですけど」

「斯衛から？」

「おかしい話ですよ、ただの説明会に斯衛が出向くなんて…」

今回、ドーバー基地に行くのは説明会とされているが裏ではアメリカなどに知らないようするため、ごく一部の人にしか知らされていない。研修から補佐役として一人同行することになったがどんな人が同行するんだろう？

第十五話（後書き）

ハム仮面のファンの皆様ごめんなさい

夢の中で出てきて洗脳される話だったんですがあまりにも斜めいく話だったんでこんなカタチで出してしまいました、すいません

次からの投稿は私用などで遅れます

Episode 0 (前書き)

プロローグ前の話です

Episode 0

Episode 0

その部屋は白いベッドに窓にはカーテンが掛かって外から見えないようにしていた。

壁に掛かっているカレンダーは1994年の6月、ベッドから上半身を起こした男の子が鏡を見ていた

「手術は終わった…?」

頭には包帯が巻かれ、手で触れようとすると痛みが走る

「まだ手術が終えたばかりだから安静にしていなさい」

部屋に紫の長髪で白衣を着た女性が入って近くのパイプ椅子に座り、友人を見るように男の子を見つめていた

「心拍数・脈は安定しているわね、熱は？」

「ないです」

「じゃあ、脳量子波は？」

「変な感覚です」

「ふーん、あなたの論文道理にかなり弄ったんだけど？」

「しばらくは様子を見ないと分かりません」

「しかし自らの体を試験体に使うなんて、ばれたら牢屋に入るわよ」

「バレなきゃ、いいのです。どうせロシアでも生まれる前の細胞に遺伝子改造しているのですから」

「ロシアね……」

「噂では超感覚能力者は念話・透視ができるみたいですよ」

「……あなた、またハッキングしたの？」

「……………」

「……………」

男の子は目を泳がせていた、女性は両手で顔を掴み自分のほうへ顔を向けた

「今回もバレていませんから（汗）ハッキングの痕跡も消しましたから大丈夫ですよ！」

「あなたね……この前は大騒ぎになったから少しは自重しなさい」

「まあ少しくらいは……………」

この前の騒ぎとは、この男の子がある国の衛星兵器をハッキングして核ミサイルを月のハイヴに向けて発射して月に核爆発が起こり月面にいたBETAを吹き飛ばし騒ぎになった

その後、衛星兵器を所有する国が調査するが原因不明とされ、誤射したという報道が流れた

「ところで、国連の計画が日本案になりそうですよ。たぶんあの国が裏で絡んでいるみたいですけど」

「意地でもあの国の計画を有利に進めるためでしょう。G元素から兵器を作り、その兵器でハイヴを攻略、G元素を回収してまた兵器にという繰り返し使えばBETAに勝利すると考えているわ」

「はあ」

男の子は呆れていた、あの国の考えの甘さに。

BETAは航空戦力に対応してレーザー級を出現させた。

つまりG元素の兵器もいずれは対応してしまう…

「―死に急いでいる表情をしているわよ」

「……………そうかもしれません」

「若干14歳で異端と言われたあんたが焦るなんてどういう風の吹き回し？」

「人類は事態を重く見ないで戦後のことだけを見ているかもしれない」

「……………」

「一部では他の星に逃げて生き延びることしか考えている人もいます」

「…それで？」

「宗教・人種・エネルギーなどで問題を抱えて協力できないことは分かりますがせめて一瞬でもいい、人類が分かり合えば…」

「BETAから勝利して平和になる？」

「違いますが人類の存続に少しでも繋がるような気がするんです」

周りからはイカれている子供だと思われるいても男の子は別の可能性を探していた

BETAとの戦争をする中で国同士のばかげたゼロサムゲームを続けて進歩しないのなら自らが行動するしかないと思い、自分の体を使い人体実験を行った

その人体実験とは肉体の強化・脳量子波が使えることだった…

「あんた、ろくな死に方しないわよ」

「はははははあ あだあ！」

「笑い事じゃないでしょうが！」

女性はカルテ使い男の子の頭を殴っていた。

男の子の頭から血は出でいないが殴られた所は赤く腫れていた

「今更なんだけど、子供らしく生きられないの？」

「無理かもしれませんが、この生き方を選んだ時に決めましたから」

男の子の親は居なく孤児で独学から博士号を取得して学会が驚愕するほどの論文を出したがあまりにも逝きすぎた論文で学界から黙殺された

男の子は学界で知り合った女性の所に身を寄せて新しい研究始めていた

「……分かったわ。とりあえず2、3ヶ月は寝たきりなるから覚悟しなさい」

「えー」

「えーじゃない、前代未聞のことをやって死んだりしたら誰が責任取るのよ」

「分かりました、香月博士」

「いいわね、絶対に安静にしていなさい、飛鳥」

香月博士が部屋を出て飛鳥は仰向けになり天井を見ていた

「けど、まだ足りないんだ。絶望を希望に変えるには……」

数日後

香月は『何故か』仮眠室にいた。眠いわけでもないのに『何故か』この場所に向かった。

香月自身も何故か分からない近くの台にはカルテが置いてあり、手にとって見てみると『なにも書かれていない』カルテだった

「なぜカルテがあるの？」

香月は誰かの置忘れだと思い台の上に戻し部屋を出て自分の研究室に向かった

香月が部屋から出て行つて数分後にドアが開いて開いたドアから黒いコートの人が入ってきた

―遅かったか……―

その黒いコートの人は何故か半透明で一部消え掛かっていた

―こ…以上、か。し　？で@%！！？―

黒いコートの人は辺りを見渡すとベッドの上に小さな光を見つけてすぐさまその光を掴み撮る。

掴み撮ったと同時にコートの人が何かに拒絶するようにドアに向かって引きずり出し始めて黒いコートの人は手にある光を離さないとして強く握って部屋から出された

―やはり、手に負えない状況になってきたか―

白い空間に黒いコートの人が居た、手を仰ぐと空中に映像が投影される

映像には平行世界の情報がスクロールされていく

―このままでは、あの世界が消滅してしまう。別な方法で干渉できないのか？―

黒いコートの人は情報を絞り始めた、平行世界の情報を見ていくとどれも同じ情報しかなかった黒いコートの人は諦め掛けていたが―
っだけおかしい情報があつた

―まさか、書き変えた者がいたとは―

その者は『ただ存在しただけ』で本来とは違う未来へ書き変えていく、だが書き変えた代償としてその世界から消滅しようとしていた、
その名前は……

―桜咲アスカ……―

あの世界でも消滅された人物も桜咲 飛鳥で手元にはその欠片しかない。

―偶然？いや違う―

黒いコートの人は考えていた。

自分はある世界にもう干渉できない、ならば消滅するアスカと欠片の飛鳥を合わせてあの世界に介入させるしかない、だがアスカは今いる世界を書き変えている最中で無理やり持つてくるとアスカがいる世界が崩壊してしまう、消滅寸前にこちらに持つてくるしかない

2年後、消滅するはずのアスカは『偶然』バナナの皮に足を滑らせ、黒いコートの人が居る空間に眠らされていた

―君に賭けてみよう。どんな結果であろうとも歪みを破壊して違う未来に向かうことを……………―

小さな光がアスカの体に入っていた。

その後二つの飛鳥を融合させた彼の物語が始まる

第十六話（前書き）

すいません、間違って古いやつを投稿してしまいました
ごめんなさい

第十六話

第十六話

アスカ SIDE

時差ぼけで体内時計を治そうと軍用車輛の窓から空を見つめていた

「桜咲少佐、ここは本当にドーバー基地なのですか？」

隣にいる人は日本帝国斯衛軍 篁 唯依中尉。この前の模擬戦の相手でドーバー基地での俺の補佐を帝国が派遣してくれた

自分の目にも疑いたくなるような光景だった、日本では余り見られない整備された道路の端は木々が生い茂って高台に洋風を思わせる城が見える

「最前線のドーバー基地だと思うんですけど……」

車輛が地下入り、ブリーフィングルームに案内させられた。4 / 5分待っていると仙台基地とは違う黒い軍服を身に纏った人たちが入ってきて敬礼をした

「国連太平洋方面第11軍仙台基地所属・桜咲アスカ少佐です」

「私は日本帝国斯衛軍調布基地所属・篁 唯依中尉です」

「私は国連軍大西洋方面第1軍・ドーバー城要塞基地所属・西ドイ

ツ陸軍第44戦術機甲大隊大隊長、ヴィルフリート・アイヒベルカー少佐だ」

褐色の肌に銀の髪、眼差しは鋭く射抜いる幾度も戦場を見てきたように感じる

「現時刻を似て、貴君ら我が隊に於ける1カ月の研修を開始する。今回の技術協力感謝する」

「はっ！桜咲アスカ少佐・篁唯依中尉、以下二名。現時刻を似て着任致します」

「我が地獄門へようこそ、桜咲アスカ少佐・篁唯依中尉。西ドイツ全軍を代表し、貴君らを歓迎する。」

アスカ SIDE END

唯依 SIDE

あの人が西独に“黒き狼王”在りとその名を讃えられるアイヒベルカー少佐

戦史と戦術教本によく掲載されている傑人

「今回の研修では我が隊におけるタイフーンを改修及び説明会を限られた期間おこなってもらつ。」

今回の研修では仙台基地が開発されたFタイプの改良型がタイフー

ンに搭載されることになっている、私の役目は補佐に監視すること

「私はジークリンデ・ファールンホルスト中尉です。短い期間ですがよろしく願いますね、桜咲少佐、篁中尉」

「こちらこそよろしくお願いします」

唯依 S I D E E N D

アスカ S I D E

「では、貴官らの在任中、身の回りの世話する者達を紹介しよう。
ララーシュタイン卿、前に」

「はっ！」

音速の男爵——ゲルハルト・ララーシュタイン

足の音で歩幅が広く、相当な体躯と考えられる、目の前に立つと2メートルぐらいで右目には片眼鏡、第一印象は紳士だった

「国連太平洋方面第11軍仙台基地所属・桜咲アスカ少佐です、お世話になります」

「日本帝国斯衛軍調布基地所属・篁 唯依中尉です、お世話になります」

「第2中隊を預かるゲルハルト・ララーシュタイン大尉である。」

「ララーシュタイン卿、後は頼むぞ」

「お任せあれ——大隊長退室ッ!!」

「歓迎の晩餐で会おう」

「「はっ!」」

「——直れッ!」

「では、桜咲少佐、篁中尉、また後ほど」

「「はっ!」」

アイヒベルカー少佐とファーレンホルスト中尉が退出してララーシュタイン大尉が何処から出したのか分からないがファイルを取り出した

「ところで桜咲少佐、研修期間の安全を保障するためにコンテナの中身を見せてもらった」

「別にかまいません」

別に見られても困るものはない、けど欧州から提出されたスケジュールに至る所に空欄がある、一体何があるんだ?

「ちょっと、よろしいでしょうか?」

「なにかね？」

「次の日のスケジュールに一部空欄があります、それはどうゆうことですか？」

「桜咲少佐には明日、模擬戦をやってもらおう」

「模擬戦ですか…」

「OFタイプの性能を上層部が確認したいと申し出があつた」

見世物か、また堅苦しいことやるのか……

アスカ SIDE

そのころ、アメリカの技術開発局では親米派から送られてきたFタイプの設計図を解析されていた

「局長、解析できました」

手元に渡された資料を見ると局長は驚愕した。

「なんだと！これでは搭載することができない」

「我々局員でも疑問に感じていました、水素プラズマジェットエンジンには出力調整などの専用プログラムが必要ですが現在ではこのプログラムを作成することは出来ません」

つまり、アスカが帝国に渡した設計図は普通に搭載できるはずもなく、アスカが作り上げたOSに書き換えないと本来の性能がだせなく、反対に危険だった。

ちなみにそのOSは帝国と魔女のFタイプの取引条件で厳重に管理されている

「だが、帝国は出力調整のプログラムを作り上げた、一体なんなのだあの国は？」

「わかりません、ただ言えることはこの技術は我々の上をいく物です」

仙台基地 S I D E

仙台基地では横浜ハイヴ跡地の基地計画が説明されていた

「以上が横浜基地の建設計画です」

「そうそう、この前言っていたあの区画だけは手を入れないで頂戴」

「ですが、エネルギーなどの供給はどうするのですか？」

「あの区画だけは開発主任が別の方法で供給するみたいだから」

「桜咲さんは今欧州にいます、副指令これでは建設が進みません」

「まりも大丈夫よ、あの区画だけは全て作業に入っているわよ」

「どうゆつこと?」

横浜基地を建設する時にアスカがトレミーを海底からドッグに進入したいと香月に言ったら人員などの問題で却下されそうになったが今回トレミーを使わないからハ口たちを使えばいいのでは?と言ったら許可が出されて東京湾の海底にトレミーが待機してカレルを装備したハ口たちが人知れず建設作業を開始した

「なんでもアスカが手配したハ口たちが作業しているわよ」

「あのハ口が!?!」

まりもが驚いていた常にアスカの周りでどうゆつわけで跳ねているあの球体が基地の建設に携わっていた

「まりも言い忘れていたんだけど、あんたに配備される不知火が間違つてアスカと一緒に欧州にいつているわよ」

「え、えええええ!」

仙台基地 S I D E E N D

アスカ S I D E

「ハクシヨン!」

「む、風邪かね。桜咲少佐？」

「いえ、風邪ではありません、ララーシュタイン大尉」

「うーむ、時差ぼけは治ってきたはず？日本と欧州の季節の違いで体調でも崩したのか？」

「桜咲少佐、季節は関係ないのである」

「!？」

「桜咲少佐、クスリの手配しよう」

「あ、ありがとうございます」

心を読まれた……何か考えるとまずいな…

「第2中隊所属、第3小隊を預かるブリギッテ・ベスターナツハ中尉だ、短期間であるが、貴官らが我々と交流を深め、欧日連帯の絆となることを願う」

「——はっ！」

「では、今回の世話役を紹介しよう、フォイルナー少尉！」

「はっ！」

女性か…どの国でも緒戦では多くの男性が戦死している。
軍の於ける女性比率が多いのは仕方ないだろうがBETAは男に何

か恨みでもあるのか？

目の前に立った人は、ポニーテールを赤いリボンでとめて白人の特徴である白い肌の女性だった

「イルフリーデ・フォイルナー少尉です、研修期間中の貴方方のお世話をさせていただきます。お見知りおきを」

「よろしく願います」

その後基地内を案内させられ、用意させられた個室で明日の模擬戦のためにノートパソコンを立ち上げていた

「なんでまりもさんの不知火が欧州に来ているの？」

まずい、まりもさんの不知火はハ口が搭載できないほかに古いOSで伊隅ヴァルキリーズ隊に配備されているOFタイプ。

明日の模擬戦までOSだけでも自分用に書き返るしかない

「明日までに間に合うかな…」

「間に合うつて、なんですか？」

「!？」

突然、声のしたほうに振り向くと唯依さんがいた

「なんで唯依さんがいるの？」

「なんでいるの？ではありません、そろそろ晚餐時間で呼びに来た

のですよ」

「え、もうそんな時間？」

腕時計をみたら晚餐まであと30分だった

「少佐、なにかあったのですか？」

「ちょっとしたミスで今ある不知火は俺のじゃなく違う人のなんだ」

「え？」

「俺の不知火はちよつと特別なんだ」

あとで香月博士に通信してまりもさんの不知火を此処で改造させて
もらうしかないな…

第十七話（前書き）

久しぶりの投稿です

原因は風邪で二週間ほど寝込んでいました
皆さんも体調管理には気をつけてください

この欧州の話は今後の話のためにイフリーデ達とタイフーンは強引に出しました

駄作・文才0などの小説ですが、どうかよろしく願います

第十七話

第十七話

アスカ SIDE

「ドーバー基地第二演習区画」

目を開くと網膜投影システムの情報が写し出されていく、模擬戦の演習場は障害物のビルが並ぶ場所だった。

さらに情報を見ていく短時間にOSを向上することができたが仙台基地に置いてきた不知火よりは性能は落ちているのはしょうがない
こっちの武装は電磁投射砲×1・長刀×2・短刀×2

香月博士に連絡して改造……ではなく改修の許可が下りてコクピットには無数のコードに繋がれたハコ、自分用のOSに書き換えてしまった、これを見たらまりもさんは泣き顔になるだろう

「まりもさんかなり弄ってすいません、仙台に帰ったら元に戻すので…」

とりあいずこの場にいないまりもさんに謝っておいた。

『JIVESの起動を確認しました』

通信が入り、気持ちを切り替える

欧州の上層部が見ている演習場で模擬戦の相手をするのはタイフー

ン4機………タイフーン？

開発で色々と難航していたと聞いていたけど、こんなに早くツエルベルス大隊に実戦配備されているなんて驚きだ

欧州でG弾を使わせないためにタイフーンの実戦配備を優先したのか？

『H Qへ4機のタイフーンと模擬戦ですか？』

『こちらH Q、4機のタイフーンと模擬戦です』

欧州の上層部、いくらデータがほしいからっていくらO Fタイプの相手に新型のタイフーン4機はないでしょう。

「はあ、中央司令部には上層部と各軍の司令が見ているんだろう、負ければ笑い種なるんだろな…とりあはずやってみますか！ハ口記録よろしく」

「リヨウカイ！リヨウカイ！」

誰も聞いていない場所で愚痴を言いつつも気合を入れて強く操縦桿を握り締める。演習場の情報を細かく見ていく、一機ずつ撃破するのが妥当かな？

『各機、模擬戦を開始してください』

『了解した。不知火O Fタイプ、アスカ・サクラザキ。これより模擬戦を開始する』

アスカ S I D E E N D

ドーバー基地 SIDE

司令部の大型モニターには4機のタイフーンと1機の不知火が映し出されていた
上層部は明星作戦の裏で活躍していたOFタイプの性能を知りたかった

「あれが改良型ですか？」

「あの電磁兵装は従来の兵器と比べられない物になっているらしい」

「電磁兵装ですか…しかし改正兵役法されているとはいえ、タイフーンの衛士たちは若すぎませんか？」

「魔女が寄越した若い技術官の相手にはちょうどいいかもしれない。」

1993年にBETAは全欧州大陸を完全制圧され、事態を重くみた欧州連合は改正兵役法が議論され徴兵の年齢が引き下げられた、今回の研修で技術者も若いと言うことで上層部は同世代を相手に模擬戦に組み込ませたのだ

「模擬戦開始しました」

司令部にいる全員がモニターを見つめる、すると不知火が急に上昇を始めてある程度高度を保ったら後退した

「あの技術官は何をしたかったのだ？」

「あの意味は一体？」

全員が不知火の行動に困惑した、BETA戦ではないが移動においては低空飛行が主流だが不知火は高い高度で飛行していた

『こちらローテ11、先ほどの行動は挑発と認識します』

『こちらローテ8、たぶん操縦ミスだと思いますが？』

秘匿回線で通信していると、突然何か当たった音がタイフーンの周りに響き渡る

『ローテ11、突撃砲に被弾。使用不可と認定』

「『！？』」

『な、なにー！？』

「あの距離から狙撃だと！？」

不知火は障害物の上に立ち、「これでどうだ！」と言いたげなほどに電磁投射砲を構えていた

「あの電磁投射砲は突撃砲ではないのか？」

「まさか、最初の行動は……」

アスカ以外の全員が驚愕した、なぜ上昇したのは相手の武装・風速・空気の密度を調べるためだった。

相手は突撃前衛、強襲掃討、砲撃支援、制圧支援で全ての距離をカバーされている、アスカは初手で狙撃を選んだ

なぜ風速などを調べたかと言うと風で実弾は曲がりやすく空気の密度によっては弾の威力は落ちる、それを踏まえたことで狙撃をした

「…… ロックオンみたいに上手くないな、けどOFタイプのセンサー類の能力は欧州では知られていないか……」

アスカはドーバー基地に来る前に調べていた、各国はどこまで転用した技術を知っているか？

各国などは武装・跳躍ユニットばかり注目しているがOS・Eカーボン・Eセンサーについては調べなかった

「俺としてはあとで色々と出来るから好都合だ。さてこちらの手は見せた、相手はどうでるかな？」

不知火に向かってタイフーンが2機近付いてくる、不知火はリニアライフルを近付いてくるタイフーンに銃口を向けると後方にいる2機は砲撃で不知火の周りに煙が立ち動きが止める

『これで貰ったあ！』

タイフーンは近接戦闘斧槍を不知火に向かって振り落としたが空振りフリユーゲルベルデに終わった

『い、いない？』

『ローテ11、上だ！』

タイフーンの衛士が見上げると不知火が上空にいた

『ローテ12、これより支援砲撃ッ……！？』

後方のタイフーンはMk57中隊支援砲を撃とうとするが不知火の位置が太陽と重なり眩しくて撃てなかった

アスカは太陽と自分が重なるように初めから狙撃ポイントを決めていた

不知火はお構い無しに真下にいる二機に向かって電磁投射砲を連射する

『ローテ11、両肩部・両脚部に被弾、機体損傷ため機能停止』

『うそだろ』

『ローテ6、両肩部に被弾、機体損傷ため機能停止』

『くっ！』

不知火は跳躍ユニット噴かせながら後方にいるタイフーン2機に急接近した

後方にいる2機のタイフーンは砲撃するが不知火は振り子のように回避続ける

『なんてスピード出しているの！ロックオンが間に合わない』

『ローテ12、ここは後退を』

モニター越しに見ている人たちは呆然だった

不知火の行動がBETA戦ではなく対人戦を行っている

「本当に技術官なのか？」

誰もが思っていることを一人が呟いた

上層部はOFタイプのデータを取るために今回の模擬戦を始めたが時間が過ぎていくことに予想を上回る出来事だった

「推進剤の消費率は？」

「7%です！」

「まだ7%だと！あの跳躍ユニットは従来の跳躍ユニットの性能を超えているのか！」

不知火はMk57中隊支援砲を装備しているタイフーンに急接近させる

タイフーンは接近させないとMk57中隊支援砲を砲撃するが当たらない

不知火は短刀を構え地面に着地した、それに合わせてタイフーンは不知火を射撃が出来る場所に移動する

『どんなに早いスピードでも着地の硬直を狙えば』

タイフーンは着地している不知火に砲撃した

弾は不知火に真っ直ぐ向かっていく、誰もが直撃だと思われたが不知火は回避した、「硬直時間って美味しいの？」と言えるほどに回避した

『な、なんで硬直しないの！？』

今アスカが乗っているまりも機には伊隅ヴァルキリーズ隊と同じく、硬直時間をキャンセルするOSが組み込まれているので硬直しないで回避した

不知火は短刀を構えて振り下げてきたがタイフーンはそれに反応して後ろに後退した

しかし不知火とタイフーンの間には斬られた銃身が空中で回転しながら落ちた

『ローテ12、支援砲使用不可を認定』

『なんて切れ味、掠っただけなのに!?!』

『ローテ12、回避してください!』

タイフーンは自分がいた場所から離れた、アスカは危険を察知して障害物の陰に隠れた

不知火が先ほどいた場所に突撃砲の弾が降り注いでいた

「げっ! 欧州の制圧支援って結構動き回るのか?」

二機のタイフーンは不知火から態勢を立て直すため不知火から離脱していた

『今の砲撃も回避するなんて...』

『ローテ12、残っている武装は?』

『突撃砲（GWS-9）の残弾がわずかとフリーユージェルベルだけ』

『そうですか、ローテ12あの94式（OFタイプ）は今までの戦術機と考えてはだめみたい』

『ローテ8、私もそう思う。』

二人の衛士は考えていた。

あの不知火にポジションが存在しない、遠距離では電磁投射砲で狙撃され、中距離では電磁投射砲に連射され、近距離では障害物の多い演習場で動きの良いが短刀を使用してくる。

『私が囷として相手の動きを封じてローテ8が切り込んでください』

『了解！』

タイフーン2機は分かれ、一機は突撃砲を連射させながら不知火を止めていた

「くっ、また動きを止めにきた！」

アスカは冷静に回避させつつ電磁投射砲を構えると身が凍えるほど寒気がした

不知火の後ろにはフリーユージェルベルテを振り下ろそうとしているタイフーンがいた

『もう逃がさないわよ！』

「げえ、直撃！？」

不知火は電磁投射砲を構えて動けなく、キャンセルしても間に合わない距離にいた

スローモーションのようにフリーユージェルベルテが不知火の背後に近付いて演習場に甲高い金属音が鳴り響いた

『うそ……』

「ありえない……」

「と、止めただと！」

不知火はフリーユージェルベルテを受け止めていた。アスカは一か八かで不知火を傾けブレードマウントを展開させて長刀でタイフーンの攻撃を防いでいた

「ふう、焦ったけど、これで終わりだ！」

不知火は電磁投射砲を撃つと同時に短刀を逆に構え背後にいるタイフーンに押し当てる
すると演習場に耳が痛くなるほどのブザーが鳴り響いた

『ローテ8、ローテ12、コクピットブロックに被弾、致命的損傷により大破と認定。』

「はぁ、はぁ、危なかった……………!？」

アスカは安堵を浮かべた瞬間、背後で何かが壊れる音がして振り向くと地面に長刀が落ちていた、アスカは機体のステータスをみると展開したブレードマウントが壊れていた

「ま…さ…か…タイフーンの攻撃に耐え切れなく……………（汗）」

『状況終了、全機作戦開始位置まで後退せよ』

「アスカ、キニスルナ！アスカ、キニスルナ！」

「気にするから！！これ他人の機体！！」

『こちらHQ、どうかしましたか？バイタリティーに乱れがあります』

『大丈夫です、問題はないです（どうしよう……………）』

通信が切れてアスカは深呼吸をして空を見ていた。

その頃、司令部では慌ただしく動いていた

「たった、4機を相手にしても被弾していないだと！」

「これほどの性能とは……………」

たった4機のタイフーンを相手してもブレードマウント以外に傷一

つもつけていなく、跳躍ユニットは常に噴かして長時間の使用を可能させた、タイフーンの特性を超える性能を見せ付けられたのだ

（桜咲少佐、あなたは一体？）

唯依はモニター越しに映る不知火は余りにも異常すぎていた、機体性能が高いがアスカは他人の機体のOSを書き換え、書き換えたOSをテストせずに模擬戦で使用して勝利をした、この世界ではありえないことをやり遂げたのだ

唯依が不知火を見つめていると同時に一機のタイフーンは不知火を見ていた

「桜咲アスカ、すごい人―」

『どうかありませんでしたか、イルファイ？』

『ん？なんでもないわよ』

2機のタイフーンは格納庫に戻っていった。

模擬戦終了してから夜中、アスカは個室で香月博士と連絡していた

『一体、何時だと思っているの？』

「いや、日本時間に合わせましたから今の時間帯は昼間ですよ！」

『で？何の用？』

「今回の研修で持っていくはずだった不知火でテストするはずだったんですが、今から送っても間に合わないと言うことでまりもさんの機体を使いたいですけど？」

『別にいいわよ』

「え？いや、そんなにあっさり決めて大丈夫ですか？」

『欧州で色々な試験データを取れるし、まりもの不知火が強化されるのならなにも問題ないじゃない』

「そうですか」

『ところで、アスカ。重大なことを言い忘れていたんだけど？』

「なんですか？」

重大なことと言われ、アスカは固唾を呑み真剣にモニターを見つめる

『お土産に天然物のイギリスワイン、よろしくね』

「えええ！ちよつと、ワインって！？……通信が切れた、天然物のワイン何処で売っているんだ！？」

アスカは通信が切れたモニターを見ながらため息をつくしかなかった

機体設定（ネタバレ）（前書き）

すいません、長い説明です

機体設定（ネタバレ）

不知火 オーバーフラッグ
OFタイプ

桜咲アスカが00のオーバーフラッグの技術を使い不知火を強化させた試作機

装甲はEカーボンを使用し機体の軽量化を実現させ、強度はマブラヴのスーパーカーボン同等だが現在コスト面に問題がある

跳躍ユニットは水素プラズマジェットを採用、燃料の水素はカーボン製のフレームの炭素分子結合体内に分子レベルで注入されていて燃料タンクを装備する必要がない

さらにオーバーフラッグのように四つの水素プラズマジェットではなく二つの水素プラズマジェットとリミッターを付けてパイロットに12G（体重の12倍）掛かることはないがリミッターを外せば軌道降下部隊が降下する時の7G以上掛かる

武装は87式突撃砲からトライデントストライカーを装備、近接格闘武器は全て高周波発生装置を搭載、短刀は高周波のほかにプラズマを発生させることでプラズマソードとして使用可能

ただし、不知火OFタイプは伊隅ヴァルキュリー隊などにしか配備されていない

激震・不知火 フラッグ
Fタイプ

これも同じくアスカがフラッグの技術を使い、激震・不知火などを強化した量産機

装甲は変わらないが跳躍ユニットは水素プラズマジェットを採用、従来のFE79の性能を超えている

コスト面ではOFタイプ以下で量産に向いている

武装についてはトライデントストライカー・プラズマソード以外の装備はOFタイプと一緒である

さらにOFタイプとFタイプは機体制御などのプログラムを搭載しているがあまりにも複雑なプログラムのためコピーができなく各国はFタイプを量産することが出来ない、このプログラムはブラックボックス化しているために現在の技術では解析が不可能である

タイフーン フラッグカスタム FCタイプ

OFタイプとFタイプの実戦データとフラッグカスタム・グラハム専用機を元にアスカがタイフーンを改修した機体

技術提供のために『タイフーンFCタイプ』は正式名称ではない、欧州ではタイフーンと呼ばれている

現段階ではEカーボンのコストが掛かるために装甲はそのまま使用、跳躍ユニットは新型の水素プラズマジェット採用している、OFタイプの水素プラズマジェットには劣るが量産機の中ではトップクラスの性能を叩き出している

武装はFタイプと一部同じである。弾を変える必要がないフラッグカスタムの試作新型リニアライフルを採用して量産ができるように改造した、電力の出力の調節でフルチャージと連射が可能になりMK57支援砲もこれと同じ技術を使い電磁投射砲に改修することになった

不知火 まりも機

GNドライブTを戦術機に搭載することを前提とした試作機、本来ならアスカ用に調節された不知火でテストするはずだったが何かの手違いでまりもの不知火OFタイプでテストことになった

装甲はGN粒子でコティングされ強度が上がり、各センサーを強化したために頭部にバイザーを装着することになった

動力源はバッテリーとGNコンデンサーを使用してハイブリット化され、背部に大型GNコンデンサーを搭載されているために兵装担架システムを肩部に装備された

跳躍ユニットは水素プラズマジェットとGNバーニアに切り替え可能、二つの跳躍ユニットを使っているために大型化されている

武装はアインのGNランチャーを右肩に追加装備、このGNランチャーは単機でGNメガランチャーを使用可能だが出力の問題で持続して照射ではなくなった、さらにGNコンデンサーとまりものOFFタイプを使っているために一発しか撃てないので本当に切り札になってしまった

左肩には高密度のGN粒子を注入した長刀を搭載させ、脚部にはGNミサイルコンテナが装着されている

トライデントストライカーと短刀は常に装備している

またこれらの追加装備はパージが可能で各パーツは機密保持のために自爆装置が備え付けられている。

第十八話（前書き）

相変わらずの駄作です
欧州編はまだ続きます

第十八話

第十八話

アスカ SIDE

模擬戦から次の日、なぜか朝から蜂の巣にされそうなほどの視線が刺さっていた

「あれが噂の少佐？若いすぎない…？」

「昨日の模擬戦で4機のタイフーンを圧勝したんですって」

「機体の性能だけでなく、衛士の腕もかなりあるみたい」

昨日の模擬戦は普通に見物することが出来ないはず？

疑問を感じつつも上層部にタイフーンの改修の説明で会議室に行く
と入り口にはMPがいた

「お待ちしておりました、『桜咲少佐だけ』お入りください」

「な、なぜですか？私は少佐の補佐でー」

OFタイプは四番目に通じているから説明は俺だけになるのか…

この交渉で俺がへまをさせないための監視役の唯依さんには悪いけど、ここは引いてもらって会議室に入った。

そして現在、会議室は張り詰めた空気が漂っていた、始めにタイフ

「インをOFタイプにそのまま改修することが出来ないと答えた、ある人は目を細め、またある人は顔をしかめていた
無理もない昨日あれだけの性能を見せ付けられ量産できないを言われたら…」

「つまりOFタイプは量産向いていないと言いたいのかね、桜咲少佐？」

「資料でも見せましたがOFタイプに使われている、改良型のスーパーカーボン（Eカーボン）は全装甲・武装に使われているため、スーパーカーボン同様のコストが掛かり量産に向いていません」

「つまりOFタイプは試験機でFタイプは量産機と言うことか―」

「明星作戦後に分かったのだがEカーボンをこの世界で生産すると00の技術に300年という水準差があり、今はかなりのコストが掛かってしまい伊隅ヴァルキリーズ隊などにしか配備されていなかった。」

「さらにGN粒子には装甲自体の強度を向上させる特性でこの世界ではEカーボンが一番強度を向上させることが分かった」

「タイフーンの改修プランについて次のページをご覧ください。」

全員が次のページを開くと釘付けになっていた

「この交渉で新たなFタイプを用意していた、今まで取ったデータを使い性能を向上させたFタイプだ」

「装甲はそのままですが跳躍ユニットは新型の水素プラズマジェットを搭載させ、武装については高周波装置と新型のリニアライフルを採用します」

「新型のリニアライフル？」

「新型は出力調整でフルチャージと連射モードを分けて使えるリニアライフルです」

タイフーンが装備するリニアライフルはフラッグカスタム・グラハム専用装備していた試作リニアライフルを改造して使うことにしている、今の突撃砲ではBETAの種類によって弾を変えるがこれなら弾を変える必要がないし、弾倉はかさばらない

「さらにMk57中隊支援砲を電磁投射砲に改修させてもらいます」

「Mk57中隊支援砲を電磁投射砲に改修するだ？」

「遠距離砲撃に適したMk57中隊支援砲を新型のリニアライフルの技術を使い、これもまた二つのモードを使えるようにします。次はOSですが新しく作成します」

「OSを作成？今のOSでは駄目なのかね？」

「はい、今のOSでは改修後の機体制御などに向いていませんので作成します、そこをお願いがあるのです」

「なにかね、桜咲少佐？」

「ツエルベルス大隊に試作OSをシミュレーターで体験してもらい、意見を取りたいのですがよろしいでしょうか？」

「別にかまわないが、なぜ意見を？」

「作っては終わりではなく、現場の意見を取り上げてさらに向上したOSを作成させたいのです」

技術者としてタイフーンの改修に全力でやるつもりだ、何よりも人の命に関わることだけは手を抜くつもりはない（あの国は例外で）

「……なるほど、だから四番目はOFタイプを開発できたのか…」

一人の高官が真剣な面持ちでみてきた、瞳は幾つもの戦場を見てきたように感じる

その高官は何かを納得した表情で周りを見渡した

「皆さん、桜咲少佐に改修プランを一任することでもいいですか？」

「…異議はない」

「こちらにも異議を唱える必要がない」

「では、桜咲少佐に一任することです」

アスカ S I D E E N D

アスカが会議室から出て行き、会議室に残っていた人たちは資料を眺めている者、通信をする者がいた

「魔女はとんでもない者を送りつけたようだ」

「ええ、初めは心配しましたがこの時代であのような熱意を持った若者いるとは……」

「おや、ドイツは国連嫌いではなかったのでは？」

「いえアメリカの操り人形（国連）は嫌いですがあの若者は別ですよ、彼は技術者と衛士の目線を併せ持ち相互の考えを知り、今回の交渉の内容を知りながらも我々に協力してくれる、私はBETA戦線から離れた一個人としての感想だがなかなか見所ある若者だよ」

「たしかにイギリスでもあのような若者がほしいものですねあ」

「何にせよ、欧州を奪還するには彼の力が必要だ、かの国が手出し出来ないようにするにもタイフーンの情報管理は厳密にしないといけないな」

アスカは唯依中尉と合流してブリーフィングルームでツエルベルス大隊に説明をしていた

「――まず、皆さんに3つのOSを体験してもらいます」

「3つも!？」

「はい、一つ目は皆さんに馴染み深い欧州で使われているOSに改良を加えキャンセルを付けました」

「キャンセルとは、桜咲少佐？」

ブリーフィングルームにいた全員が聞きなれない単語に困惑していた
アスカは端末機を操作して模擬戦の映像を映し出し、映像はタイフ
ーンがMk57中隊支援砲で不知火に向かって砲撃したが不知火は
着地した瞬間に回避した映像だった

模擬戦の時にアスカは後で色々と役に立つと思い、ハ口に模擬戦を
記録させていたのだ

「あのときの！」

イルフリーデが声を上げ全員がイルフリーデを見るアスカは「待つて
いました」と言わんばかりの表情で説明を続けた

「これは、前の模擬戦で不知火が着地する時にタイフーンが中隊支
援砲で狙っている映像です。イルフリーデ少尉この時なにか不自然
なことがありましたね？」

「はい、あの不知火は着地するときに機体が硬直するはずが硬直せ
ずに回避行動をしました。あれは一体？」

「イルフリーデ少尉ありがとうございます、これがキャンセルです。
普通は着地するときに機体制御がかかり硬直しますがその行動をキ
ャンセルさせ、次の動作に移します」

「それでスムーズに回避したのですか——」

「そうです、BETA戦に措いて硬直時間に狙われやすいですから、
硬直を無くして次の行動に移します。次の二つ目はFタイプのOS
です」

「あれは今のOSでは？」

「FタイプのOSは、機体の制御・キャンセルなど細かに書き換えたものです、そして三つ目が特殊なOSです」

「特殊なOS？」

「これはまだ試験段階のOSでFタイプを向上させた物と考えてください、そして最後に三つのOSを体験した人は簡易な報告書を取ります、なにか気になったところなど書いてください。これで説明を終わります、何か質問はありませんか？」

「……」

ブリーフィングルームは時間が止まっていた、アスカは辺りを見渡して挙手をしている人を探した

「それでは、質問がないみたいなので失礼します」

アスカは敬礼をしてブリーフィングルームを出て行った、ブリーフィングルームは嵐が過ぎ去ったような状態だった

「上官という威厳がないと言っか、なんだろう……」

「あの人、本当に模擬戦で勝利した人？かなりのギャップがあるんですけど……」

「オレはあんなのに負けたのか……」

「フ、桜咲アスカ、変わったヤツだ……」

ツエルベルス大隊が騒いでいる時にヴィルフリート少佐は微笑んでいた。

アスカ S I D E

シミュレータールームでOSのインストールが終わり、格納庫で搬入されているタイフーンを見ていた
西洋の剣、甲冑などを連想させる機体だ日本の戦術機とは違ってなんかいいな
一機もらいないだろうか？

「長距離の行動に密集近接格闘戦を主眼に置いた機動性、欧州の地形に対応した機体か…OSは後で出来るから今は装甲や関節部分を改修させるしかないな…」

「ところで桜咲少佐？」

「ん？なんです、唯依さん？」

「アレは一体？」

唯依さんの視線の先は廃棄される筈だったMk57中隊支援砲を見つめていた

「故障したMk57中隊支援砲を再利用するために持ってきたけど？」

「アレを再利用するのですか!？」

「新品のMk57中隊支援砲を分解して作るより、故障したMk57中隊支援砲を分解して足りないパーツを発注したほうがコストが掛からないからもらってきたんだ」

この世界では故障など使えないものは廃棄されると聞かされていた、そういうものを利用できないのか? と思い、試しに故障したMk57中隊支援砲を使い電磁投射砲に改修することにした
基地総合司令も驚いていたな、目が点になっていたのが印象に残っている

「さて部品リスト確認が終わったから今日ここまでにしよう、明日はツエルベルス大隊のシミュレーターとタイフーン改修を始めるから今日はゆっくりと休むといいよ」

「そうですね、今日は色々とありました…」

あちゃー今日は知らないことばかりで唯依さん落ち込んでいるよ、なにか気晴らしなことはないのかな?
アレをやってみるか!

「唯依さん!」

「な、なんですか、桜咲少佐?」

唯依さんが驚いた表情を浮かべていた

「けがや病気に、気をつけなはれや!!」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

唯依さんを元気付けようとして『世界の。てまで』で一部使われているギャグをやった…

虚しく風の音がして鼓動が早くなり顔が熱くなる

はい、スベりました。

バナナの皮は滑ります。それはあなたが体験しました

雪の上でスキー板が滑ります。当たり前です

滑り台で滑りました。滑らないと遊具の意味がありません

あゝもう恥ずかしすぎる! 穴があったら入りたい、穴がなければ不知火を使って掘ってやる!

アスカ SIDE END

アスカがチャンカ。イのネタをやった瞬間、通路を歩いていたラーシュタイン大尉は何かを感じ取り足が止まっていた
同じくラーシュタイン大尉と一緒に歩いていたベスターナツハ中尉は不思議に思った

「どうかなされましたか、大尉？」

「む、この基地で我が輩の勝るものに劣らないポーズを取るとは……」

「はあ……？」

唯依 SIDE

たぶん桜咲少佐は私のことを気遣ってくれているのだろう。

「桜咲少佐、私のことを気遣ってくれてありがとうございます……
……って何やっているんですか!？」

私は桜咲少佐に礼を言おうと見たがそこにはいなかった、慌てて周囲を見渡すと桜咲少佐は強化装備を着て不知火に乗り込もうとしていた

いつのまに強化装備を着たのだろうか？

「恥ずかしいから穴掘ろうとしていたところだけど？」

「恥ずかしいとか、穴を掘るとか関係ないですから戻ってきてください!!!」

「あ、はい！」

桜咲少佐は私の元へ駆け寄ってきた
タイフーン4機を相手にして勝利したり、国と少佐に秘密があった
りする人がこんな一面があるなんて変わった人

「もう大丈夫です」

「よかった、それじゃ俺は戻るね、お疲れ様」

「はい、お疲れ様です」

桜咲少佐の後ろ姿を見て、あの人は一体どうゆう人なんだろう？と
気になり始めた

第十八話（後書き）

アスカはアホなんです（泣）

弄られ・オチ担当・変態と言う呪いのスキルが付いています

欧州に繋がらないとツエルベルス大隊の出番が無くなってしま
うのでアスカの知らないままに欧州の上層部といい関係にさせまし
た

次回からイフリーデ達と少しずつ絡ませます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9603u/>

マブラヴ オルタネイティヴ 今から（チートが）介入する予定です

2011年11月20日19時30分発行